

動画配信技術で拓く市民参加型コミュニティメディアの活動と課題 — 長期時間軸での実践研究を通してみえてきたこと —

Activities and Challenges by a Citizen Participatory Community Media Utilizing Internet-Based Video Streaming Technologies: through Practice-Based Research in a Long-Term Timeline

辻野理花 *TSUJINO, Rika*

要旨

2000年代初頭におけるインターネット環境の質的変革と動画配信の本格化、スマートフォンを中心とする通信デバイスの開発と普及率の拡大、映像コンテンツを個人が自由に発信することを可能にしたSNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)の急速な発展は、映像メディアに多大なる影響を与え、双方向コミュニケーションを可能にした。そして、新型コロナウイルスの感染拡大に伴うインターネットを利用したリモートワークの常態化により、今やオンライン技術の活用は人々の暮らしに不可欠のものとなっている。本稿では、こうしたインターネット技術を活用する形で市民参加型地域メディア活動をスタートさせた非営利組織が運営するコミュニティメディアについての長期にわたる実践研究を通して、一般の人たちが情報発信の主体となり、人や組織のゆるやかなつながりと交流の場をつくり出す可能性について、それを可能にした技術的な観点も交えて考察する。

Abstract

Qualitative transformation of the internet communication technology (ICT) as well as full-scale operations in streaming services in the early 2000s, the evolution of various communication devices including smartphones and the upsurge of their penetration rates, and the rapid development of social networking services that enable individuals freely to distribute their video contents, made an significant impact on the field of visual media, thereby leading to a new age of interactive communication. Additionally, the new normal of work-from-home through the internet due to the COVID-19 pandemic has completely changed people's daily lives for which the utilization of on-line technology is indispensable. On the basis of practice-based research in a long-term timeline, this paper discuss the long-term activity of a citizen participatory community media operated by a non-profit organization that started the local media activities by utilizing the ICT, and furthermore, discusses the possibility that members of the general public take the initiative to disseminate information and create communicative spaces where people can be loosely connected in the web of people and organizations, and also mentions the technical viewpoints.

キーワード

コミュニティメディア / 地域メディア / 非営利組織 / 動画配信 / アクションリサーチ

Keywords

Community Media / Local Media / Non-Profit Organization / Video Streaming / Action Research

1. はじめに

一般的なメディアの動向として、2000年代初頭に始まるインターネット環境の質的変革と動画配信の本格化、スマートフォンを中心とする通信デバイスの開発と普及率の拡大、映像コンテンツを個人が自由に発信することを可能にしたSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）の急激な進展は、多くの映像メディアに多大な影響を与えるとともに、情報の送り手と受け手の双方向コミュニケーションを可能とする時代に突入した。加えて、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴うインターネットを利用したリモートワークの常態化により、今やオンライン技術の活用は人々の暮らしに不可欠のものとなっている。

一方、コロナ禍を経て、地域活動はどのように変化してきたのだろうか。2023年5月8日から新型コロナウイルス感染症は5類感染症へ移行したことに伴い、人々の社会活動も落ち着きを取り戻し、コロナ禍前に戻ったかのように見える。筆者は本稿で考察するコミュニティメディアの活動に2009年より関わっており、その活動を通して地域のさまざまなNPOと出会う機会が多い。コロナ禍におけるNPOの活動にはどのような影響があったのだろうか。地域活動を行うNPOを含む多くの市民団体は新型コロナウイルス感染症拡大の初期には対面による活動を全面的に中止していたと考えられる。そして、その後の感染状況の推移を注視しながら活動を再開した団体がある一方で、行動制限の状況が長期化する中、活動を継続していくことが難しくなり、その活動に終止符を打った団体もある。また、一見すると活動を継続できているかに見える市民団体の中にも、コロナ禍で活動の規模を大幅に縮小したことにより、コロナ前に関わっていたボランティアの多くが現在もなお活動から離れた状態にあるとも聞く。著者が関わる地域メディアの現場から見えてくる地域活動の現在の情景である。コロナ禍で直接の交流が難しくなったのは活動を支えるメンバー個人だけでなく、NPOなどの市民団体間の交流でもそうである。

兵庫県神戸市東灘区に活動拠点を置く特定非営利活動法人ひがしなだコミュニティメディア（以下、HCMと記す）は、2010年8月に特定非営利活動法人として設立され、2012年にインターネット放送局を開局した地域メディアである。当初はコミュニティFM（ラジオ）局の開局を目指していたが、2010年12月にコミュニティFM局の開局を断念し、インターネット技術を活用した動画配信の放送局の開局へと方向転換し、地域に活動拠点をおきながら、開局当初からグローバルな情報発信が可能なメディアを目指して出発した。^{★1} 著者は、2009年からHCMのNPO法人設立以前の準備段階時期に参画し、その後、法人運営とインターネット放送局に関わってきた。

本稿では、急速に情報技術革新が進む中、比較的初期にインターネット技術を活用する形で地域メディア活動をスタートさせた非営利組織が運営する市民参加型のコミュニティメディアに関する長期にわたる著者の実践研究を通して、地域の一般の人たちが情報発信の主体となり、人や組織のゆるやかなつながりと交流の場をつくり出す可能性について、それを可能にした技術的な観点も交えて考察する。メディア活動の長期的な活動過程・持続発展を調査・分析する研究は、その重要性については論じられてきたものの現状ではまだまだ少ない。^{★2} 著者がコミュニティメディア活動へ参画し、インターネット放送局開局から10年が経過した現時点で、実践研究を通じた長期時間軸での分析を試みた。具体的には、コミュニティメディア設立の経緯、とりわけ、インターネット放送局の形態を選択

★1——HCMの構想は、2008年にコミュニティFM局の空白エリアである東灘にコミュニティFM局を開局したいという若者と大学教員との出会いから始まった。総務省情報流通行政局(2023)によると、コミュニティFM局とは、「市区町村の一部の区域において、地域に密着した情報を提供するために、平成4年1月に制度化されたFM放送局」とある。超短波放送(FM放送局)で1992年に放送法が改正され、同年1月10日からコミュニティ放送制度が施行された。

★2——長期時間軸からコミュニティFM事業を研究した数少ない例として、金山のあまみFMに関する地域メディア分析がある(金山2019)。

した理由や当時のインターネット放送局を取り巻く技術的背景について述べる。また、アマチュアリズムの視座に基づき、メディア活動に参画した地域の人々の変遷と活動を通して創出された地域との関係性の構築のプロセスを開局から10年という時間軸で分析するとともに、放送局としての定期配信のみならず、ウェブ空間を基点とする交流プラットフォームづくりやワークショップ等イベントの主催による地域の人々をリアルに結ぶ交流の場の創造についての試みについても触れる。また、コロナ禍以前より開始した多地点ライブ配信を可能とするメディア活用手法の開発により、コロナ禍での地域メディア活動体制に速やかに移行できた点についても言及する。そして最後に10年間の地域メディア活動からみえてきた課題についても言及する。

2. 研究の目的と方法

2.1. コミュニティメディアとHCMのインターネット放送局MEDIA ROCCO

金山 (2007) によると、コミュニティメディアは、「1つの地域コミュニティを情報エリアの場として、この場を構成する人々がコミュニケーションを送信することのできるメディア」であると定義される。また、林 (2003) は、「一定の地域社会を情報エリアとするコミュニケーション・メディアを地域メディアとすれば、それは具体的には地方紙、フリーペーパー、自治体広報紙・誌、回覧板、折り込み・チラシ広告類の印刷媒体やローカル放送局、有線放送電話、同報無線、CATVなどの放送・通信媒体がある。」というように、地域の情報を媒介するものすべてがコミュニティメディアと考えられ、かなり広いメディア媒体がコミュニティメディアの範疇に入ると捉えている。一方、コミュニティメディアをその特性から規定すると、船津 (2006) によれば、コミュニティメディアは、「身近な情報や地域の情報などのコミュニティ情報を提供するメディア」であり、「災害情報を提供する重要な役割」を果たし、「読者や視聴者が番組に参加したり、また企画・制作をするなどの番組づくりを行うことができる」ものであると指摘されている。また、『メディア用語基本事典』によると、コミュニティメディアについて次の要素が挙げられている (渡辺・山口・野原 2011)。

- ①特定の地域に根ざして、地域住民に共有される地域固有の問題に応える
- ②ある程度、地域住民がアクセスないしは参加しうる双方向性をもつ
- ③その地域の自立的な発展に寄与する機能を有する

つまり、コミュニティメディアは、一定の地域社会を情報エリアとするコミュニケーション・メディアであり、一定地域の住民の情報へのアクセスを可能にするだけでなく、そこへ参加し、発信しうる参加型のメディアという特徴を有しているものと理解される。さらには、コミュニティメディアは、地域固有の問題の解決に応えるとともに地域の自立的な発展に寄与する機能をも有していることを期待されていることになる。すなわち、地域における情報提供だけではなく、地域における問題解決や自立的発展に寄与する「場」の創出もコミュニティメディアの果たすべき役割と考えられる。

従来、日本におけるコミュニティメディアとは、放送法と電波法に基づき許可されたコミュニティFM局やCATVの放送事業であると考えるのが普通であった。そのような状況下において、HCMは、放送法と電波法にとらわれないインターネット放送局MEDIA ROCCOをいち早く2012年10月に開局した。イン

ターネットを活用する放送局を開設することが可能となった背景には、すでに述べたように2000年代に入ってからインターネット環境とデジタルデバイス技術の飛躍的な発展がある。HCMは、こうしたインターネット環境とデジタルデバイスをいかに有効活用しながら、メディア活動を展開していくべきかといった観点から活動を開始した。そして一般の人たちが情報発信の主体となり、人や組織のゆるやかなつながりと交流の場を作りだそうとするプロセスにおいて、「参加しうるメディア」となるために、こうしたインターネット環境と技術はどのように機能するのかといったことを意識しながらその活動を進めてきた。したがって、著者が関わってきたコミュニティメディアは、インターネット放送局において毎週定期的に番組配信を行ういわゆる放送局としての活動だけでなく、その組織形成初期から、コミュニティメディアの関連事業を展開し、その設立当初から人やコミュニティとの様々なつながりを作りながら、地域メディア活動を展開してきた。

2.2. コミュニティメディアに関する先行研究

コミュニティメディアの考え方に関しては、1980年代にはすでに地域メディア研究として、専門家を中心とするマスメディアに対する対蹠概念として論じられている(田村1983)。非専門家としての人々が生活に根ざしたコミュニケーションの「場」としての地域のメディアという広い概念で捉えられており、当時のニューメディアとして期待されていたケーブルテレビ(以下CATV)への期待とともに、地域メディアの「文化装置」^{★3}としての可能性についても考察された。その後、実際に、中海テレビ放送などに代表されるCATV事業によるコミュニティ放送を利用した地域活性化が政府からも期待された(林・田中2014)。また1992年のコミュニティ放送制度に関する法改正に伴いコミュニティFMラジオ局が全国的に開局されるようになり、1995年の阪神・淡路大震災を契機とする地域防災メディアへの期待も相まって、コミュニティメディアといえば、CATVかコミュニティFMかという状況となり、1990年代以降、各地のCATVとコミュニティFMの(成功)事例について多くの調査研究報告が出版されてきた。

しかしながら加藤によれば、実践例は増加したものの、現状では、コミュニティメディアの実態や生態学が少なく、ある事例を瞬間的に輪切りにした「美しい絵」のピックアップ集の紹介に終始していると厳しく断じている(加藤2015)。その上で、加藤は、地域メディア論を再考する上で、「構造軸」・「機能軸」・「時間軸」の方向での拡張が必要であると論じている。ここで、「時間軸」の拡張という点については、地域のメディア事業は、それが生まれ、継続され、時に消滅していくライフストーリーとでもいえるべきプロセスがあり、そのメディア実践の時間的経緯を追うことは難しいとしながらも、決してメディアの活躍シーンの瞬間的輪切りのみの紹介ではなく時間的視点からメディアを捉えていく、いわゆる地域メディアの事業過程論の展開が必要であるとしている。

一方、鳥海によれば、コミュニティメディアに関する先行研究を整理した上で、先行研究の視座の特徴として、アクティビズム・ローカリズム・アマチュアリズムの3つの視点に分類されるとしている。この3つの研究視点や研究実態の境界は曖昧さを含むが、特に、アマチュアリズムの視点は、これまでのコミュニティメディア研究の中で最も論じられ難く、十分な議論が蓄積されてこなかった領域であると指摘している(鳥海2020)。加えて、コミュニティメディアの研究者の多くが、現場の実践者としての経験を有するものの、その経験に裏打ちされた実践知ともいえる素養が研究の中で十分に活かされてきていないとし、研究対象の

★3——Millsの定義するところの「人々がそれを通して見る人類のレンズ」であり、「人々はその媒介によって自分たちが見るものを解釈し報告する」(Mills 1963=1971: 323)。

「中」と「外」という複眼的な視点をアクロバティックに切り替えながら実践研究をおこなう「デザインの視点」が重要であると提案している。

このようにコミュニティメディアの先行研究の対象は、主としてCATVとコミュニティFMに集中してきた。一方、放送法上の「放送」ではないが、本稿で述べる情報技術革新の結果としての動画配信技術の発展により、インターネット放送局の開局が2010年代に増加していくが、その実態は必ずしも明らかとなっていない。本稿で論じるインターネット放送局MEDIA ROCCOも2012年に開局しており、NPO法人として、最初期からの開局を果たして現在まで継続するコミュニティメディア事業である。インターネット放送局に関する論考は現在のところ見当たらないが、紹介記事の形で松本が、東京都足立区の「Cwave」や（松本 2020; 2021; 松本・佐藤和文・佐藤博昭 2021）、東京都板橋区の商店街が運営する「ハッピーロード大山TV」や茨城県が運営する「いばキラTV」について紹介している（松本 2021）。「Cwave」は、当初のコミュニティFM局開局の見通しが立たない中で、2013年7月にインターネット放送局を開局した経緯があると紹介されており、本稿のインターネット放送局MEDIA ROCCOと似た経緯で開局している。しかし、非営利で自治体からの援助を受けずインターネット放送局を、地域の一般の人々（アマチュア）が情報発信の主体として番組制作・運営のすべてを行っているMEDIA ROCCOのような例は他にないと考えられる。

2.3. 研究課題と調査方法

本研究では、2.2項で述べたコミュニティメディア研究における現状を背景として、研究対象としてはこれまで注目されることのなかったコミュニティ放送事業、すなわち、本稿で取り上げるHCMの市民参加型地域メディア活動の一端としてのインターネット放送局MEDIA ROCCO（メディアろっこう）の生成・持続・発展を、加藤による時間軸での視点から分析することを目的としている。2007年に田村により纏められた『現代地域メディア論』第9章の加藤の論考「コミュニティ放送の事業とディレンマ」によれば、コミュニティFMのような地域メディア事業は、社会的事業であり社会的サポートがあってはじめて成立する事業でありながら、現実問題として、経営的困難・番組編成・リスナー獲得・ボランティアをめぐる構造的ディレンマを抱えている実態が指摘されている。さらに、コミュニティメディアがいかなるストーリーで誰が事業を立ち上げるのかという設立時の事業デザインがあってはじめて持続可能となり得ると結んでいる（田村 2007: 135）。また、同書第10章で、牛山は、地域メディアの担い手の養成のあり方に言及し、事例を踏まえた分析は今後の課題としている（田村 2007: 153）。このような問題点に加えて、前項の鳥海の指摘、すなわちアマチュアリズムの視点からのコミュニティメディア分析がほとんど実施されてこなかった点にも着目して、本研究における検討課題とした。すなわち、加藤の指摘するCATVやコミュニティFMなどの地域メディアが構造的に抱えるディレンマとは比較的無縁の、アマチュアリズムとローカリズムの観点からコミュニティメディア事業の立ち上げを実施したHCMがどのようにして事業を持続させてきたのかという点を、著者の実践研究を通じて、現場の葛藤も含めた形で長期的な視点から分析すること、そして、コミュニティメディア事業のメディア表現活動の担い手の中心となる一般市民（地域住民）、つまりアマチュアの人々の養成・参画の実際と課題点について、コミュニティメディア活動の10年間にわたる動的プロセスからみえてきた点を明らかにすることである。またアマチュアの担い手がインターネット放

送局で活動することを可能にした技術的な視点についても、これからインターネット放送局を立ち上げようとしている人々にとっての参考になると考え、本稿で言及する。

調査研究方法としては、HCM設立時から現在までの、活動実践者としての著者の参与型のフィールドワークをもとにした質的調査法に基づいている。この参与観察法は、HCMメンバーと協働しながらインターネット放送局MEDIA ROCCOの企画・放送・運営活動を経験しながらの実践的な調査研究方法であり、アクションリサーチと呼ばれることもある [杉万の言うところの“research in action” (杉万 2006)] (中村 2008; 谷, 芦田 2009: 46)。したがって、特に断らない限り、活動協働者としての「私」の視点からの記述である。^{★4} また、本論文では、参与観察のほか、分析資料として、運営会議議事録・番組キューシート・番組リスト (その一部は本文表1と表2と表3にまとめている)、そして10年以上を経て500回を超える膨大な数となった番組アーカイブを使用している。番組アーカイブは過去の活動の瞬間的な時間を失敗も成功も含めて閉じ込めた形の貴重な分析資料となる。

★4——佐藤の述べる参与観察者のタイプとしては「完全なる参加者」に近いが(佐藤2002: 69)、いわゆる「潜入ルポ」ではなく、活動メンバーは、著者がメンバーを含めた活動全体を調査対象としていることを、理解している。

3. インターネット放送局MEDIA ROCCO開局に伴う 時代的・地理的背景

3.1. メディア環境の変遷：

2000年代 インターネット環境とデジタルデバイス技術の発展

私たちは現在、「メディア環境」の中で日々暮らしており、インターネットやデジタルメディアは常にそこにあることがあたりまえとなっている。オランダのメディア研究者Deuze (2011) は、このメディア環境を「メディア・ライフ」という言葉で表現し、「私たちの生活は、with mediaではなく、in media (メディアの中) で営まれている」と述べている。土橋 (2022) は、「デジタルメディアが人々の日常生活の全域に浸透した」と現在の状況を概観している。本節では、2000年以降におけるインターネット環境とデジタルデバイス技術の変遷と地域メディア活動を行う非営利組織HCMの活動の歴史をまとめた図1を参照しながら話を進めることとする。

現在から遡ること2000年代初頭のメディア環境を振り返ると、総務省 (2000; 2001) の『通信白書』『情報通信白書』では、「ITがひらく21世紀～インターネットとモバイル通信が拓げるフロンティア」と「加速するIT革命～ブロードバンドがもたらすIT革命」が特集として掲載され、2000年代に入り、インターネットが個人レベルで急速に浸透していくであろう時代の到来が指摘されている。白書の中では、1999年2月にiモードサービスが開始し、「携帯電話端末単体で直接インターネット上の携帯電話専用のウェブコンテンツにアクセスが可能になるサービスの提供 (総務省2000)」が可能となったことが、インターネット利用者数の大幅な増加の要因であると指摘している。そして1999年から2001年にかけての情報通信技術の特徴は、「常時インターネット接続サービスの普及と低廉化が実現したブロードバンド時代の到来 (総務省2001)」であるとしている。

2000年代のインターネット環境とデジタルデバイスの飛躍的な発展は、個人のメディア環境を大きく変化させていったと言える。iモードサービスの導入の翌年の2000年に世界初のカメラ付きケータイが発売され、モバイルのデジタルデバイスで写真を撮影しメールに添付し送信できることが可能となった。2007年に発売されたiPhoneは、Apple社が当時「iPhoneで携帯電話を再定義」とブ

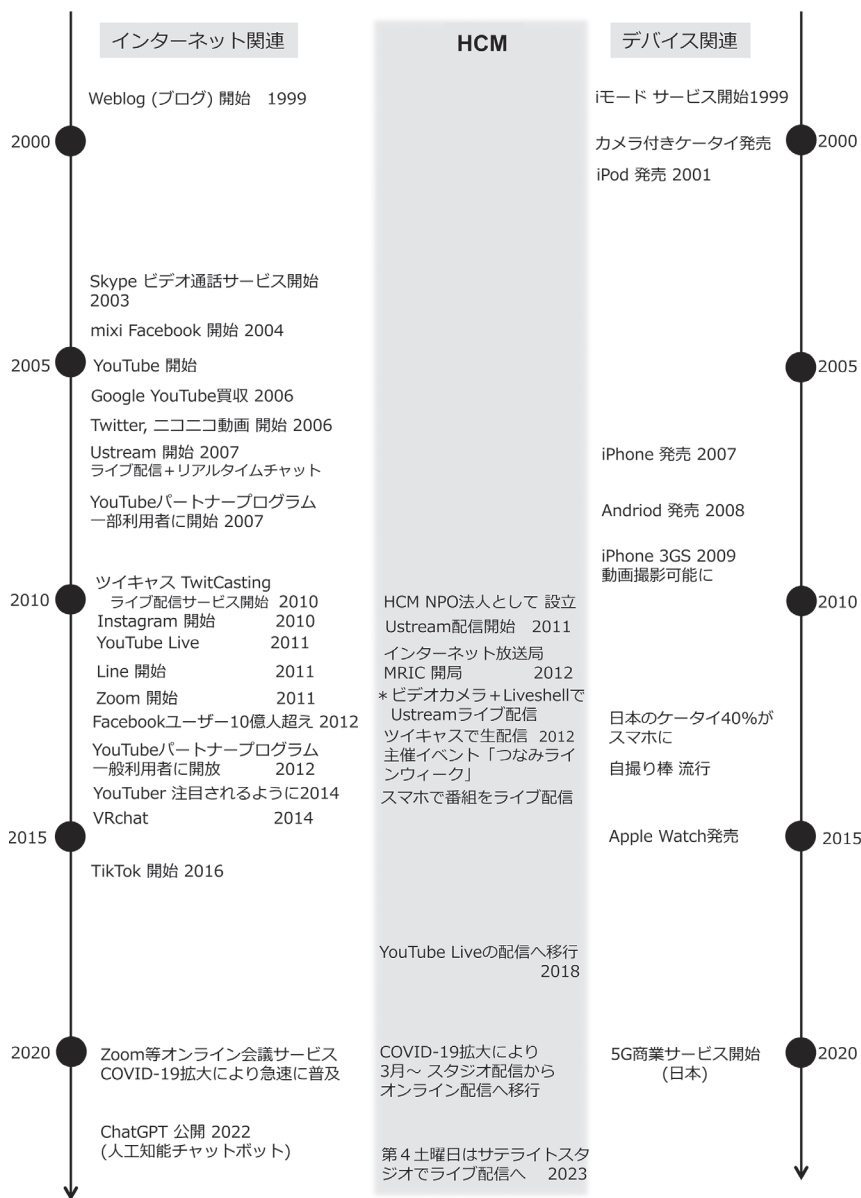


図1: 2000年以降のメディア史 (筆者作成)

レスリリースしたように、携帯電話と iPod とパソコン並みの機能を搭載したインターネット通信デバイスで、いつでもどこにいてもインターネットにアクセスできる常時インターネット接続可能な環境を個人に提供することになっていった。**★5** その2年後の2009年にはiPhoneで動画撮影が可能となり、その後2010年代初頭には日本のケータイの40%がスマートフォンユーザーとなっていった。加えて、ネット通信速度の高速化技術も加速度的に進化し、2020年に入り、5Gの商業サービスが開始されるに至っている。

一方、インターネットにおける映像配信とSNSの発展を見ていくと、2004年にfacebookとmixiがSNSサービスを開始、その後2006年にTwitterもサービスを開始した。インターネットにおける映像配信のエポックメイキングは2005年にYouTubeが動画投稿サービスを開始したことに始まる。2006年には日本でニコニコ動画が同様のサービスを開始した。YouTubeは、インターネットへの動画のアップロードを誰にでも簡単に無料で利用できるサービスであることもあり、急速に利用者が増加していき、動画による情報配信の新たな展開へのきっかけとなった。

インターネットによる放送を可能とした技術に関連したサービスとしては、イ

★5—— Apple社のウェブサイトのNewsroomの2007年1月7日プレスリリース記事「アップル、iPhoneで携帯電話を再定義」参照。

インターネットにおける映像の配信にライブストリーミング機能を付与してスタートしたUstreamであり、2007年にそのサービスを開始した。当時YouTubeにはこの機能はなく、Ustreamはライブ配信とリアルタイムチャット機能を搭載した動画配信サイトの先駆けである。2010年には同様にTwitCastingとよばれるライブストリーミングサービスが開始されている。2011年になると、YouTubeもライブ配信できるサービス、YouTube Liveを開始した。同年には、チャットや通話ができるコミュニケーションアプリのLineや、オンライン会議サービスZoomが登場している。このように、2000年代に進行したメディア環境の変革は、2010年に活動を開始したHCMのメディア活動の中で有効に活用され、一般の人たちが情報発信できるしつみを構築していく一助となったのは間違いない。つぎに、HCMが活動拠点としている地域の概況について説明する。

3.2. 地域の概要

兵庫県神戸市東灘区は、神戸市の最東部に位置し、北の六甲山系から南に位置する大阪湾へ複数の河川が流れこむ自然豊かな地形を有している。区沖には1993年に埋め立てが完了した神戸市第二の人工島の六甲アイランドと、食品製造加工業中心の工業地域、第四工区の深江浜町と呼ばれる臨海工業地域も存在する。同区は、大阪と神戸の中間に位置し、鉄道は、JR、阪急電鉄、阪神電鉄の3電鉄が東西に通っており、大阪へも通勤圏内であるため、居住地として人気が高いエリアである。

神戸市東灘区は、1995年に発生した阪神淡路大震災で長田区と並んで最も被害の大きかった地域であり、家屋の約半数が全半壊となり、1,500人近くの人たちが亡くなった。震災で人口が大幅に減少したが、2000年11月には、震災前の人口を超えるところまで回復している。神戸市人口・人口動態データ集の統計によると、2023年3月現在の同区は人口21,0756人である。神戸市では2番目に15歳未満人口が多い区である。東灘区では7割以上の人がマンションなどの集合住宅に住み、5割以上が震災後に新たに住民となった人たちが暮らしているという特徴がある。大阪と神戸の双方の通勤圏内という地理的条件もあり、転入も多い。^{★6}

また人工島の六甲アイランドにはインターナショナルスクールが2校あり、外国人が多く暮らしている。また、第四工区の深江浜町と呼ばれる臨海工業地域には食品製造加工業の工場があり、外国人労働者の就業の受け皿となっているエリアである。こうした状況から、東灘区では32人に1人が外国人住民で、区の総人口の3.1%を占めている。^{★7} 国籍別では、人口の多い順に、韓国又は朝鮮、中国、ベトナム、ネパール、米国、フィリピン、台湾、ブラジル、インドネシア、スリランカ、ペルー、ミャンマー、フランス、カナダとなっている（2023年3月現在）。

子育て世帯が多く暮らす東灘区には、6つの大学、6つの高校が存在し、多くの教育機関を擁する学生の街としての側面もある。文化的な側面に目を向けると、5月の風物詩となっているだんじりまつり、灘五郷のうち御影郷・魚崎郷の二郷を有する酒蔵の街でもある。

HCMはこうした地域の諸特徴を捉えながら、東灘区に住み、学び、働く人びとをつなぐ場と情報発信のしつみをつくるコミュニティメディアの設立を目指し、2008年から始動した。

★6——『すてきがあふれ、交流の風が吹くまち ふるさと都市・東灘 東灘区計画』2011年によると、全国的に少子高齢化の傾向がある中で、東灘区では毎年約2,000人の子どもが生まれ、人口増加が続いていると指摘している。

★7——2023年3月現在、日本の総人口に占める在留外国人数の割合は、2.2%。神戸市総人口に占める在留外国人数の割合は3.4%。

4. 地域メディアの生成・発展・変容の分析

4.1. プロローグ：コミュニティFM局構想 -2008年、想いがつながり動きだす-

特定非営利活動法人ひがしなだコミュニティメディア（HCM）は、2010年8月に特定非営利活動法人として設立された。その最初のきっかけは、2008年に遡る。コミュニティFM局を立ち上げたいと相談にやってきた1人の若者と当時甲南大学教員の森田三郎氏の出会いからだった。その実現に向けて、コミュニティFM局の現状と実践を把握するために、まず近隣のコミュニティFM局や、大学主体で開局していた放送局等の取材を通じた情報収集を行う先進事例の調査を進めた。森田氏が、当時「東灘区には大学が6つあるので大学が核になるのではないか」と思い、自分の周囲から始めていった」と語っているように、自身の関わりのある場所から、コミュニティFM局開局の可能性を探り始めた。^{★8} 注目すべきは、放送局開局へ向けた動きは、ただ東灘の地域にコミュニティFM局を実現したいというその想いだけで始まったという点である。

同年12月には、森田氏が担当していた地域連携科目「メディア文化論（I）」で、甲南大学のコミュニティ・デザイン・センター（現在の甲南大学社会連携機構地域連携センターの前身組織）と協力し、地域住民に公開する形の公開講義「地域メディアとしてのFMラジオ局の社会的役割と意義 - 東灘コミュニティFM放送局開設計画をめぐる -」が開催された。この公開講義では、コミュニティFM局の立ち上げの相談にやってきた若者が放送局開局に関する具体的なプレゼンテーションを行い、コミュニティFM局の実践者たちのコメントやアドバイスや質問等のディスカッションを行い、学生たちや一般の人たちとともにローカルメディアの可能性と課題について考える最初の重要な機会となった。^{★9}

コミュニティメディアの設立に関心を寄せた教職員や学生を含む大学関係の有志は、ワーキンググループ（WG）を作り、コミュニティFM局開局の可能性を探るため、コミュニティFM局に関連する事例調査と開局の認可申請の際に必要な電波調査を始めた。筆者もこの時期から活動に加わった。その理由は、著者の博士論文で、外国人支援や多文化共生を志向するNPOが日々の活動で直面する課題について考察した際に、地域の異なる分野のNPO等が協働することで各NPOが直面する課題の解決の糸口が見つかる可能性があるのではないかと考え、コミュニティメディアがそうしたNPOをつなぐしかけや方策に寄与するのではないだろうかと考えていたからだった（辻野 2009）。

コミュニティFM局関連調査と同時進行で、FM局運営の母体となるひがしなだコミュニティメディアを特定非営利活動法人として設立するための準備も急ピッチで進み、2010年5月、設立総会を行い、2010年8月20日に特定非営利活動法人の認証を受け、ひがしなだコミュニティメディアが誕生した。

ひがしなだコミュニティメディアは、その定款に、「神戸市東灘区に暮らし、働き、学ぶ人びとに対して、コミュニティメディアに関する事業などを行い、地域共生社会の活性化と安心・安全な地域づくりに寄与すること」と定めている。「東灘に関わる人びとが、東灘区で働き、学び、暮らす人びとに必要な、きめの細かい情報を、自分たち自身の手で集め、話し合い、発信していく場と仕組みをつくる」ことを目的としている。^{★10}

その後、電波調査とコミュニティFM局の認可を担当する近畿総合通信局とのやりとりを通して、東灘区で電波をだす場合、周辺に影響が出ないようにするた

★8——2012年10月13日（土）11:00から「第1回 MEDIA ROCCO開局記念配信」がライブ配信され、その初回の番組で森田氏が語っている。
<https://vimeo.com/51580831>

★9——当該科目と公開講義等の資料に関しては甲南大学文学部事務室にて保管されており、当時のコミュニティFM構想時期の動きを知ることがができる。

★10——HCMのウェブサイト参照
<https://mediarocco.jp>

めには1ワット以下に抑えなくてはならず、現実的にラジオの聴取には難しい可能性があること、放送局の開局準備と年間のメンテナンス費用に数千万円が必要で資金調達の課題があることなどが明らかとなった。WGのメンバーは、コミュニティFM局の開局に関する調査結果を検討し議論を重ねていたが、2010年12月にコミュニティFM局は断念するという結論に至った。しかし、ここでWGのメンバーの1人が、動画配信技術に関するマニアックな知識を豊富に有していたことが、インターネット放送局の開局につながることになる。まさにアマチュア리즘の視座でコミュニティメディアの可能性が拡がることになった。

4.2. 第1期：インターネット放送局開局から草創期（2011年1月～2014年3月）

4.2.1. インターネット放送局開局を目指して

まずは、2011年からインターネット放送局開局までの動きを見ていこう。前述のように2011年1月、ワーキンググループ（WG）が設置され、今後のコミュニティメディアの方向性について話し合い、結論として、インターネット上の放送を目指したコミュニティメディアに力を入れていくことが決まった。この頃になると、WGへは大学関係の有志だけでなく、地域住民の参加も得られるようになり、そうした地域住民の1人（以後A氏と呼ぶ）が、インターネットを利用する動画をはじめとするストリーミング技術に詳しいことからUstream活用の提案があった。「**図1：2000年以降のメディア史**」にあるように、Ustreamは、2007年3月にアメリカ合衆国で設立されたライブストリーミングができる動画共有サービスでライブ配信とリアルタイムチャット機能を有していた。^{★11}

★11——YouTubeはオンライン動画投稿サイトで、当時ライブストリーミング機能はなかった。

2011年のWG会議議事録によると、放送局で活用する配信技術を決めていくプロセスについてワーキンググループのメンバー間で次のようなやりとりが行われている。

「自前で持つのはインターネットで、You Tube、Ustream、HPを充実させて当面はやっていこうと思います。」

「電波ではなく、ネット配信なら明日にでもできるのに、準備だけでなにもできていない気がする。（A氏）」

「準備だけということでもないんですけど、Ustreamで垂れ流しというのをやっていくと、今は新鮮だけど、すぐに飽きられる。」

「Ustreamは垂れ流しじゃなくても、やっていけばいいのではないかな。（A氏）」

「番組の発信はどのメディアですか？（A氏）」

「YouTubeで、ポッドキャストで、やる。」

「Ustreamの双方向性の機能が活かしていない。一方通行な感じ。プロセスを、メイキングを流しながら、番組も流す。メイキングは信頼性が高くなる。誰がやっているのかというのを見られるのが強い。その人がやっていることなら、また見ようか。できるまでのプロセスを放送する。週に1回1時間くらい配信する。講座を受講した人もその時に来てちょっとしゃべろうよというように。それをアーカイブにする。（A氏）」

「まずやってみて、失敗しながら、進んだらいいやん。」

「人とのコミュニケーションがやりたいことだから。」

「思いきって、それいきますか。」

「インターネット放送の試験放送はUstreamを使い、番組制作をどうすると

いう話をしているところを流す。」

誰もが参加しやすいコミュニティメディアを目指し、そのためにはどの動画共有サービスを使うのか。気軽に参加してもらうためにはどうすればいいか。どのくらいの頻度で番組を配信するのか。現在、HCMが運営するインターネット放送局MEDIA ROCCOの方向性が、当時のWGメンバーたちの中で交わされた上のような会話の積み重ねで、徐々に形作られていく様子が見えてくる。そして、放送局の開局に先立ち、パイロット番組を制作し、インターネット上に番組を配信していくことを通して放送局のイメージを伝えるとともに、実績を作っていくとWGメンバーの間で話し合った。

HCMの2011年度法人事業報告書によると、インターネット上の放送で「定期的、継続的に送信し続ける放送を実施すること」との記載があり、そのためにUstreamによるライブ配信とその映像のアーカイブ化およびHCMウェブサイト上でのアーカイブ映像の公開が行われた。2011年度のHCMのメディア活動としては、①定期的なインターネット放送を実現するための技術の習得、②番組制作を実践できる人材育成のための番組制作講座の開催、そして③HCMについての一般への周知活動、の3点をWGメンバーで行なった。

①については、UstreamとfacebookとTwitterの技術習得が急務であり、こうした技術に詳しい地域住民A氏が講師となり、WGメンバーはOJT (On-the-job training) で繰り返しトレーニングを受け、Ustream配信時に併用するfacebookとTwitterによる参加がスムーズに行えるようになっていった。

②の番組制作講座では、2種類のワークショップを継続的にWGメンバーが実施した。それらは一般住民を対象としたワークショップと、外国にルーツのある子どもたちを対象としたワークショップだった。コミュニティメディア設立へ向けての事前調査で、HCMの活動拠点である神戸市東灘区には外国人住民が一定程度暮らしており、地域の多様性をコミュニティメディアの活動に反映させることは重要だと考え、著者は後者のワークショップを開催することをWGメンバーに提案し、メンバーから了承を得た。こうして、著者を含めたWGのメンバーで番組制作の担い手の育成を目指した。

③については、防災をテーマに4種類のイベントに関わり、HCMについて一般に知ってもらう機会を作った。うち3種類のイベントは防災に関するセミナーで、東灘区にある2つの大学で開催され、HCMはUstreamによるライブ配信とそのアーカイブ化を担当した。

もう1種類のイベントは、HCMの主催イベントとして、「3.11つなみラインウォーク」を企画し、「東灘つなみ到達ラインを歩く」をテーマに、2012年3月11日、実際に東灘住民とともに歩くという行事を実施した。その様子を、(i) ビデオカメラを使ったUstreamによるライブ配信と、(ii) iPhoneとiPadを利用したTwitCastingによるライブ配信という2種類のライブ配信を実験的に実践した。^{★12} この主催イベントでは、80名ほどの熱心な参加者があり、阪神淡路大震災で大きな被害を被った東灘区の住民の防災・減災についての関心の高さを知る機会ともなった。

2012年にはいると、Ustreamのライブ配信の技術習得が進み、番組参加を希望する地域住民も現れるようになり、インターネット放送局を本格的に開局しようという気運が高まっていった。2012年6月9日、第1回HCM「メディアROCCO」開局準備会を開催することになった。開局準備会を定期的実施し回を重ねる中で、放送局の参加希望者はいつしか、当初の大学関係者に加えて、

★12——Ustreamのライブストリーミングサービスに加えて、2010年に開始したばかりのTwitCastingのライブストリーミングサービスも実践し、インターネット放送での活用の可能性について実験した。TwitCastingの様子は、アーカイブ記録があり、当時の動画配信環境を振り返ることができる。
<https://twitcasting.tv/mediarocco/movie/3977187>

地域からの参加者がその同数に増えていた。地域からの参加者は、前述の番組制作講座出身者が多くを占めた。

著者が、2011年4月に番組制作講座の受講生に放送局への参加希望理由を聞いたところ、地域メディアに参加したい理由の1つに、東灘区で子育てをしているけれども、区外から移住してきたので、知り合いがあまりいないという悩みを挙げた。2008年からの放送局の構想段階で浮かび上がっていた東灘区の新住民と旧住民の交流が薄いという状況が、参加住民の生の声で確認された。地域住民が主体的にコミュニティメディアに参加することにより、地域における問題解決や自立的発展に寄与する「場」の創出へと繋がっていくことを著者は再認識した。

また、この開局準備会中に、WG内で番組内容について様々に検討していくうちに、Ustreamの特性を認識する機会があった。それは、Ustreamに熟知するA氏からの発言だった。「家でskypeにつないで複数でやりとりをするのをUstream配信している。Skypeを通じて3人でしゃべっているところに、違う人からの反応がくる。Ustreamは双方向性で、その時間だけ、気軽に参加できる。普段の生活のコンテンツを切りとるとするのがいいのではないか。出来あがるまでのプロセスを放送する。(WG会議議事録 2011年3月より)」

映像といえば、編集をしてから公開するというイメージがメンバーには強かったが、ライブで参加し、双方向性でリアルタイムチャットができるというUstreamの特性を活かす番組づくりを意識した瞬間だった。そこから、インターネット放送局の番組は、ライブで行うという合意が、開局準備会の参加者の間で共有されていった。

2012年10月13日(土)の11時(少し過ぎて)、MEDIA ROCCO開局記念配信がスタートした。事前にフライヤー等で広報を行い、地域で利用できるスペースで、公開生配信を行い、近隣の人たちも会場に参加をする形で、1時間のライブ番組を無事に終えることができた。^{★13}以来、MEDIA ROCCOは、毎週土曜日の11:00-12:00の時間帯にライブ配信で定期的に番組を配信し、そのライブ番組をアーカイブ化し、VimeoとYouTubeのアーカイブサイトを利用しながら、アーカイブの構築も行なっている。^{★14}

4.2.2. インターネット放送局草創期：放送経験者とともに

HCMのメディア活動の将来ビジョンには、次のことが表明されている。

「地域に暮らし、働き、学ぶ人びとの協力の下、東灘の各地域の住民の自宅や会社、学校、行政、公共施設、NPO団体などにサテライトスタジオを開設し、ホームページを核としたネットワーク型のマルチメディア局として、緊密で柔軟な情報と対面的な交流の場を作り、地域から発信をしていきたい」

この目標の下にHCMは地域メディア活動を現在まで継続している。その実現に向けて、HCMは、①開局したインターネット放送局の活動を核としながら、②NPO法人としての事業を並行して実施する形で、そのメディア活動を進めている。^{★15}本節では、①と②について適宜言及しながら、2012年10月開局から2014年3月までの活動を分析する。

2012年の初回の番組ライブ配信から2023年7月末で、MEDIA ROCCO放送局は、564回の定期配信番組回を迎えた。放送局草創期はどのような人たちが参加し、何を模索していたのだろうか。草創期のメンバーは、HCM法人設立に尽力したWGメンバーと番組制作講座を受講して新たに加わったメンバーで構成されていた。後者の参加者の中にはプロでアナウンサーをしていた人たちが含まれていた。著者がMEDIA ROCCOの活動に関心を持った理由を番組制作講座

★13——MEDIA ROCCO開局記念配信回
<https://vimeo.com/51580831>

★14——番組のアーカイブはVimeoサイトを主に利用しているが、速報性が必要な場合にYouTubeの動画コンテンツにもアーカイブをアップロードし公開するようになってきた。また、Ustreamが、2016年にIBMに買収され、「IBM Cloud Video」に移行した。HCMは、放送局のライブストリーミングサービスをUstreamからYouTubeへ移行することを決定し、2018年8月からYouTubeのMEDIA ROCCOチャンネルで、ライブ配信番組を開始した。

★15——HCMのコミュニティメディア事業には、大きく分けて3種類である。インターネット放送局の毎週の定期配信番組は、①の事業に含まれる。①動画配信による定期的・継続的配信事業 ②ウェブサイトを中心とした情報発信と交流の場の構築 ③ネットワーク形成と担い手育成事業

時（2011年4月）にたずねてみると、以前アナウンサー業をしていたが、配偶者の転勤を機に、東灘区に転入してきたと言う。県外からの転入であり、区内に気軽に交流できる人があまりおらず、人との交流を求めているところ、HCMの番組制作講座参加者募集のフライヤーを見て、自身のプロフェッショナルも活かせると考え、応募したとのことであった。表1「番組リスト表」を参照していただきたい。番組リストのVimeo # を検索に入力すると、各配信回のアーカイブにたどりつく。番組に出演するキャスターをみると、こうしたプロフェッショナルのメンバーが活躍していることが分かるだろう。

配信内容に注目すると、毎回のように取り上げるトピックとしてはUstreamの使い方についてであった。初期の頃は、まず番組の視聴の仕方や双方向性を活かした視聴者の番組参加の仕方を伝えるコーナーを設けていた。また、出演者の関心が反映された番組内容の企画が散見される。例えば、子育て世代の出演者が関連するテーマを取りあげたり、関連イベントの現場取材し、ライブで配信する番組となっている。こうした形で1年半ほど放送局の番組は継続していった。

配信回	配信年月日	Vimeo #	配信内容
第1回	2012/10/13	51580831	開局記念配信: 兵庫県神戸市東灘区のインターネット放送局 MEDIA ROCCO(メディアろっこう)の開局記念ライブ配信 特集1 Media Roccoってなに? 特集2 どんな人が関わっているの? 地域のイベント情報
第2回	2012/10/20	51898985	特集1 東灘こどもカフェって? USTREAMの参加の仕方 特集2 まったりカフェ イベント情報コーナー ・ひがしなだ およこ科学教室ほか
第3回	2012/10/27	52309188	特集1 阪神地域の祭り探訪: だんじり編 USTREAMの参加の仕方 特集2 つながる喫茶 イベント情報コーナー ・ひがしなだふれあいフェスタ2012ほか
第4回	2012/11/3	52741250	特集1 東日本大震災被災地気仙沼への支援の取り組み USTREAMの参加の仕方 イベント情報コーナー
第5回	2012/11/10	53379209	特集1 サリーの備えあれば嬉しいかもNo.1 USTREAMの参加の仕方 特集2 スイーツ甲子園 イベント情報コーナー ・防災訓練ほか
第6回	2012/11/17	53769176	特集1 陳さんと太極拳の愉快的仲間たち USTREAMの参加の仕方 特集2 「後見人」ってご存知ですか? イベント情報コーナー
第7回	2012/11/24	54191709	特集: 出張配信@甲南大学摂津祭
第8回	2012/12/1	55232188	特集1 摂津祭の紹介 定番コーナー: USTREAM配信 特集2 父親は必要か?: 子育てと父 地域情報コーナー ・NANJO MIRACORE ・ウィンターフェスティバル
第9回	2012/12/8	55165563	特集1 お米で平和を! 特集2 11月18日の防災訓練に参加してみよう イベント情報コーナー
第10回	2012/12/15	56219019	特集: 中山寺ブレママフェスタ2012 (出張配信)
第11回	2012/12/22	56223068	特集1 異文化お正月料理 中国ダイコン餅 USTREAM配信: スマホで生配信に書き込む方法 特集2 まったりカフェ 地域情報コーナー
第12回	2012/12/29	56803844	特集1 神戸 スポーツ事はじめ 定番コーナー: USTREAM配信の視聴の仕方 特集2 まったりカフェ

表1: 番組リスト表 [2012年10月~2012年12月29日] (筆者作成)

4.3. 第2期：放送局の担い手の多様化と拡がり（2014年3月～2018年9月）

4.3.1. つながりがつながりを呼ぶ担い手

MEDIA ROCCO放送局に新たな動きが生じたのは、2014年の春間近な3月から4月にかけてであった。2014年4月の運営会議では放送局の人材育成をテーマに話し合いが行われた。それまで放送局活動に関わってきた人たちの負担が増えてきたという認識を共有し、新たなメンバーの加入を検討することになった。この運営会議での話し合いでは、メンバーの中に大学関係者が複数いたこともあり、「学生部会を立ち上げてやっていくのはどうか。」という意見が出され、以後、学生に参加を呼びかける方向性を進めていくことになった。こうして、毎週土曜日の番組配信に大学生たちが時々参加するようになっていった。表2「番組リスト表」を参照していただきたい。3月中旬から毎週のように大学生の誰かが参加するようになり、4月に入ると本格的に大学生たちが参加するようになった。これを機に、大学生たち自身が取り上げたいテーマを考え、自分たちで企画するようになり、その制作活動から、のちに「学生企画番組」が誕生し、1時間の番組の全体の構成から特集等の各コーナーの内容すべてを企画し、番組をディレクションするようになっていった。★16

★16——第112回MEDIA ROCCO定期配信 2014.11.29 学生企画特集「初めての! MEDIAROCOCO クッキング:おいしい唐揚げ」は大学生が企画した番組初のクッキング特集である。このように学生企画では学生たちが多様な番組の企画を生み出した。<https://vimeo.com/113829652>

★17——第98回MEDIA ROCCO定期配信 2014.8.23 学生企画特集「若者落語家は文化を語る」はその一例である。<https://vimeo.com/104614241>

また、大学生たちが積極的に参加するようになってから、彼らが取材先で出会った人たちを番組のゲストに迎えてお話を伺うという企画を立てたり、取材先で出会った人たちの中から番組のキャスターに関心を持つ人が現れ、若いところでは小学生もキャスターとして活躍するようになった。★17 一方でMEDIA ROCCOでは開局当初から参加する年配のキャスターたちも様々な企画を提案するなど、異なる世代が異なる関心を番組にしていこうという好循環が生み出されていった。そして、番組配信スタイルにも変化が表れてきた。スタジオでのライブ配信が安定的にできるようになり、スタジオを飛び出し、地域活動やイベントの現場からライブ配信する「ライブ中継」という番組配信の回数が増えてきたのもこの頃であった。表2「番組リスト表」によると、2014年1月～5月の定期配信の中で「第65回」「第76回」「第78回」「第82回」「第85回」の配信回5回が「ライブ中継」である。この「ライブ中継」は、のちに、現場をライブ配信する番組「出張配信」と名付けた番組配信スタイルへ繋がっていった。

4.3.2. だれもがアクセスできる動画配信技術のしくみを作る

この時期には多様な番組が生み出されるとともに、放送局での配信技術が確立されていった時期でもあった。HCMではどのような配信の技術と機材セッティングを作っていたのだろうか。コミュニティFMやCATVといったコミュニティメディアでは、ラジオ放送局やテレビ放送局の長い蓄積があり、放送技術と機器はすでに確立されている。しかしながら、HCMが当時模索していた動画配信技術を活用したインターネット放送局では、どの配信技術を採用し、どの機材を使用するかという組み合わせについては、メンバーで試行錯誤しながら、最初から作っていく必要があったのである。

これまで見てきたMEDIA ROCCOの活動からも明らかなように、MEDIA ROCCOは参加型のコミュニティメディアである。放送局にゲストとして参加するだけでなく、放送局の担い手自体が一般の人たちであり、特に放送のプロフェッショナルであることを条件とはしていない。そのため、技術的な要素も含めたメディアへのアクセスをどのように可能にしていくかは非常に重要であった。この時期になると、Ustreamを活用したライブ配信の技術と機材セッティン

配信回	配信年月日	配信内容
第65回	2014/1/4	特集 ひがしなだニューイヤーコンサート本番直前生中継@甲南大学甲友ホール
第66回	2014/1/11	特集1 ひがしなだコミュニティメディア(HCM)誕生からMEDIA ROCCO開局までを振り返る 特集2 まったりカフェ お正月どうすごしましたか？ 地域情報コーナー
第67回	2014/1/18	特集1 知っとう?! うはら風土記 特集2 まったりカフェ 地域情報コーナー
第68回	2014/1/25	特集1 あきらめない心: 脳梗塞から復帰するためのリハビリ奮戦記2回目 特集2 被災地の心をつなぐ女子会 地域情報コーナー
第69回	2014/2/1	特集1 ひがしなだニューイヤーコンサートを振り返る 地域情報コーナー
第70回	2014/2/8	特集1 祝! ひがしなだコミュニティメディアの収納棚完成 コミュニティ大工さんに制作のお話を伺う 特集2 卒論研究テーマ 今昔 地域情報コーナー
第71回	2014/2/15	特集1 男の育児休業について 特集2クイズで梅Walk 梅の味覚フェア 地域情報コーナー
第72回	2014/2/22	特集1 梅一つ火会(摂津岡本梅まつり主催者)の活動について 特集2 知っとう?! うはら風土記 芦屋編 地域情報コーナー
第73回	2014/3/1	特集1 季節を考える: 民俗学的、生活学的な季節のお話 特集2 季節を考える: 地球環境の変動サイクルと季節のお話 地域情報コーナー
第74回	2014/3/8	特集1 ひとりでも寂しくない町づくりをめざす (一般社団法人)みんないっしょの活動について 特集2 シリーズ ウハラメの知恵① 柿チップスで元気に寒の戻りも乗り切りましょう! 地域情報コーナー
第75回	2014/3/15	特集1 片付けとその難しさ: 思い出を封印できるか? 特集2 栗林公園からほのぼのレポート 地域情報コーナー * 学生参加
第76回	2014/3/22	特集 アーモンドフェスティバル ライブ中継! * 学生参加 地域情報コーナー ※ネット環境不良のため、ライブ中継できず。アーカイブのみ
第77回	2014/3/29	特集 ネパールシリーズ第3弾: 写真家の目から見たネパール社会」 地域情報コーナー * 学生参加
第78回	2014/4/5	地域情報コーナー * 学生参加 特集 観桜会直前ライブ中継 桜まつりを楽しみましょう
第79回	2014/4/12	特集1 東灘こどもカフェ 春の催し * 学生参加 特集2 まったりカフェ 地域情報コーナー
第80回	2014/4/19	特集 東大寺 百済観音の謎を考える * 学生参加
第81回	2014/4/26	特集1 男の子はなぜ女の子より劣るのか: 学力格差と男女別学 特集2 今年のだんじりを楽しむポイント 地域情報コーナー * 学生参加
第82回	2014/5/3	特集 だんじり直前 ~本住吉神社からライブ中継! 地域情報コーナー * 学生参加
第83回	2014/5/10	特集1 いろんな地元のお祭り 特集2 今オススメの本 地域情報コーナー * 学生参加
第84回	2014/5/17	特集 コミュニティにやさしい小規模農場: マスメディアの報道するアメリカの実像と虚像 地域情報コーナー * 学生参加
第85回	2014/5/24	特集 阪神淡路大震災から学んだこと: 『甲南大学の阪神大震災』を材料として * 学生参加
第86回	2014/5/31	特集 大沢からのグローバルな田植えライブ中継! * 学生参加

表2: 番組リスト表 [2014年1月4日~2014年5月31日] (筆者作成)

グに一定の方法が確立されていった。それを模式的に表したのが図2である。図2が示しているように、非常にシンプルな配信セッティングである。この時期のMEDIA ROCCOの番組配信時の配信機材の基本形である。ビデオカメラ1台とビデオカメラに接続するマイクとLiveshellがあればライブ配信はできる。

Liveshellとは、PC不要で高画質な配信ができるライブ配信機器である。

ライブ配信で使用する機材の方法には複数ある。例えば、PCとビデオカメラとビデオスイッチャーとオーディオミキサー等の機材の組合せによるライブ配信や、PCとOBS（Open Broadcaster Software: PCでライブ配信する際に使用できる無料のソフトウェア）を活用するライブ配信の方法もある。HCMが目指したのは誰もがメディアを使うことができるしくみを作ることである。つまり、HCM設立当初から様々な機材を試し、番組配信を重ねながら、技術的な側面においてメディア活動に参加できるとはどういうことなのかについてメンバー同士で試行錯誤を重ねていった結果、最もシンプルな図2の方法、つまり、どの世代の人たちでも使える上述のセッティングを確立できたことは、番組配信を継続していく上で重要なことであった。

★18——第2期には多くの学生たちが放送局の活動に参加し、その中にはNPO法人事業にも活動の場を広げるなど継続的な参加の経験が卒業論文のテーマへと発展していった学生も出てくるようになった。そうしたメンバーの1人F氏は卒業後もHCMの運営面でスタッフとして携わっている。「MEDIA ROCCOが卒業論文になりました!」
<https://mediarocco.jp/?p=1618>

この時期には放送局の活動だけでなく、HCMの法人事業として主催のワークショップやイベントを企画・開催するようになり、こうした活動にも学生たちが参加するようになった。★18 例えば、外国にルーツのある子どもたちを対象に多様な文化的背景の人たちのメディアへの関心を広げるメディアワークショップを、著者を中心として継続的な実施を行なった。またHCMは、地域メディアの試みとして、地域イベントのライブ配信の技術協力や地域のNPOや大学の関係者、そして個人がつながる機会を創出する主催交流イベントも開催した。この試みは、ウェブ空間だけでなく、リアルな空間で地域の人びとの新たなつながりをつくることを目的としてHCMとして企画したイベントであった。こうした地域活動の現場に関わる継続的なメディア活動は、MEDIA ROCCO放送局への新たな人材の参画にも繋がっていくこととなった。



図2: スタジオライブ配信 (筆者作成)

4.4. 第3期：新たな配信方法の試みとコロナ下の地域メディア活動 (2018年10月～2020年2月)

4.4.1. 多地点ライブ配信の試み

HCMの立ち上げ時の事業のひとつとして、「つなみラインワーク」を開催したことはすでに述べた。そうしたイベントをHCMはスマートフォンやiPadでライブ配信中継する実験を行った。しかしながら、著者が当時のライブ配信映像を確認すると、解像度が低く、またインターネット接続も途切れることがあるなど、当時のインターネット環境ではスムーズで高画質なライブ映像を配信する

ことが難しい状況であった。放送局が開局してからも、2013年、2014年にも同様の試みをHCMとして行っていたが、解像度はまだまだ低い状況だった。

一方、番組配信でスマートフォンなどのモバイル通信機器を使うことにより、メディアによる情報発信をより多くの人たちが手軽に行えるようになる可能性が高くなる。そのためMEDIA ROCCOの番組を活用しながら、それを可能とする技術的なしくみを構築できればと著者が放送局スタッフに呼びかけ、B氏やC氏と共に積極的に取り組んだ。その試みが多地点ライブ配信である。「多地点」とは、それぞれがその時いる複数の場所からデジタルデバイスでつながり、番組配信を行うセッティングのことで、「多地点ライブ配信」と放送局メンバーで検討し名付けた。

次の図3を参照していただきたい。多地点ライブ配信の技術的なしくみを構築する目的は、一般の人たちが情報発信主体となり、一人ひとりが今いる場所から配信に参加できるようにすることである。

2018年7月7日（土）、その多地点ライブ配信の本格的な実践は突然やってきた。いつもならスタジオにスタッフ全員が集まり、番組配信を準備するはずだったのだが、この日は各自、自宅から番組にアクセスせざるをえない状況となった。2018年7月5日朝から7日朝にかけて、兵庫県では、台風の影響で断続的に大雨となり、県内15市町に大雨特別警報が発令された。そして7月7日（土）はまさにMEDIA ROCCO定期配信の日。その前日から翌日の番組配信をいつも通りスタジオで行うかどうか、スタッフの安全をどのように確保するか等をスタッフの間で話し合った。その結果、今後も起こりうるかもしれない自然災害時の番組配信のことも考慮した上での新たな試み、「複数地点をつないでのライブ配信番組」を行うことを決めた。そして、予定していた特集をすべて取りやめ、緊急特集「東灘区 土砂災害に備える」を配信した。当日の放送局スタッフの自宅のある東灘ー京都ー神戸ー大阪の4地点をむすび、それぞれの場所の台風の状況を伝えた。★19

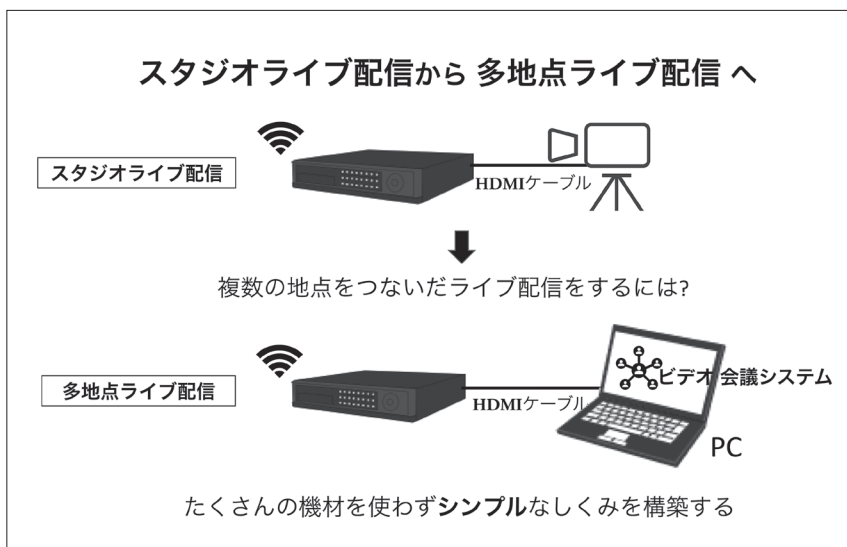


図3: スタジオライブ配信から多地点ライブ配信へ (筆者作成)

この経験から、災害などの緊急時に、スタッフ一人ひとりが各自の居場所から配信できる重要性をより認識することとなり、2018年後半から多地点ライブ配信の技術的なしくみの構築を継続的に進めていくことをHCMメンバー間で確認した。その後も同年10月27日や2019年3月9日、2020年1月18日の配信回において、番組中に、スマートフォンを使ってスタジオ外から中継したり、番組

★19——第300回 MEDIA ROCCO 定期配信
2018.7.7 特集 東灘シリーズ「緊急特集：東灘区・土砂災害に備える」<https://vimeo.com/320896136> で実際の番組を視聴できる。
また、この時の状況について、筆者は、アメリカのコミュニティFM局の日本語番組「HARUKANA SHOW」に出演し、詳細を音声で語っている。
<https://harukanashow.org/archives/10637>

★20——第316回の配信回では、B氏が中心となり、多地点からの中継について実践し、解説している。第316回MEDIA ROCCO定期配信 2018.10.27 特集「多元中継ってどうすればできるの?」
<https://vimeo.com/330035696>

に参加するなどの試みをHCMは実践していった。★20そして、メンバーの誰もが今いる場所からライブ配信に参加できるようにする継続的な取り組みは、2020年のCOVID-19の拡大に際し、大きな成果を生み出すことにつながっていくこととなった。

4.4.2. コロナ禍の地域メディア活動とこれから 2020年3月～

4.4.2.1. スタジオ配信から多地点ライブ配信へ

新型コロナウイルス感染症拡大は世界中の人々とその活動に大きな影響を及ぼした。HCMのメディア活動も同様であった。2020年1月に入り、新型コロナウイルス感染症の影響が頻繁に取り上げられるようになり、放送局のコーディネーターを担当していた著者は、放送局活動の継続の可能性に関して考え始めた。同年2月になると、新型コロナウイルス感染症の影響が色濃くなってきていたことから、配信方法をスタジオ配信から、別の配信方法への展開を模索するために、放送局メンバーのB氏とC氏とともに、それぞれがいる3地点をつないでライブ配信する実験を繰り返し行った。2月下旬にはこれでメンバーの安全を確保しつつ、放送局活動を継続していくことができる目処がついた。そこで、HCMでは翌月からの番組をスタジオ配信で実施することをやめ、多地点ライブ配信を採用することに決定した。

2020年3月7日、放送局スタッフはそれぞれの場所からskypeでつながり、多地点ライブ配信で番組の配信を試み、とくに大きな問題も生じず、番組を終えることができた。★21 それ以来、基本的に多地点ライブ配信方法を継続して現在に至っている。

4.4.2.2. コロナ禍で生み出したネットワーク型の情報発信

HCMとしてコロナ下もメンバーが協働して多地点ライブ配信の仕組みを構築することにより、番組配信を継続していくことができた。その一方で、メンバーが直接会うこともなく、また取材先を訪問することもできない状況では、これまでの番組制作のスタイルは大きな変化を余儀なくされると、著者は当初、消極的に考えていた。例えばゲストを番組に迎えてのトーク企画は難しくなるだろうと考えた。MEDIA ROCCOのメンバーは、以前から多地点ライブ配信の経験を積み重ねてきたため、慌てることなくスムーズに配信方法の変更に対応できたが、一般の人たちには難しいのではないかと。

ところが意外にも、ゲストをオンラインで迎えて特集を組むというチャレンジが早々にやってきた。それは多地点ライブ配信へ移行して3回目の2020年3月21日、第389回の定期配信だった。★22 普段のHCMのメディア活動を通して関係を構築してきた外国人支援活動を行なっているNPOから、手洗いや歯磨きに関する多言語絵本『たぶんかこどものけんこうえほん』を出版したので、番組で取り上げてほしいとの連絡があった。コロナ下という緊急時にコミュニティメディアは何ができるだろうか。そのことを実践する機会をHCMは得たわけである。

著者は、当初はオンラインでのゲストの出演は難しいであろうと考えていた。しかし取り上げる内容から判断して、出版に関わった方をゲストに迎え、番組で直接話をしていただく方がよいと考え直し、多地点ライブ配信で番組を配信している旨をゲストに伝えたところ、ビデオ通話で出演できるかやってみますとの前向きな返事が返ってきた。この番組配信によって、多地点ライブ配信に一般の人たちが自らのデバイスを使い、コミュニティメディアに参画する機会へとつながったのである。

★21——2020年1月からの多地点ライブ配信の歩みについては、HCMウェブサイト、「ドキュメント：MEDIA ROCCO放送局 多地点ライブ配信への歩み 2020」としてまとめられている。
<https://mediarocco.jp/?p=3733>
第387回MEDIA ROCCO定期配信 2020.3.7(1/2) 特集1「働くって何だ?」& 地域情報コーナー
<https://vimeo.com/402861965>

★22——第389回定期配信 2020.3.21(1/2) 特集1「たぶんかこどものけんこうえほん」
<https://vimeo.com/407962886>

コロナ下のHCMの活動の変化と拡がりについて、番組内容、メンバーや地域の人たちの参加の観点から見ていこう。表3「番組リスト表」を参照していただきたい。この表は、2020年3月の多地点ライブ配信への移行から1年間の番組表である。この表を見ると、それまでの番組配信と異なる点に気づかれると思う。番組内容の変化である。特集のタイトルを見ていただくと、新型コロナに関連した多彩な番組が生まれたことが理解される。

新型コロナウィルスに関する独自リサーチを加えた内容、外国人コミュニティへの情報提供、世界6カ国と関西ローカル4箇所をつなぎコロナ下の状況を伝える内容、コロナ下でのNPOの活動、Zoomの使い方や動画の作り方のテクニカルな内容、等々がその例である。放送局メンバー一人ひとりが保有しているネットワークと能力を活かした番組が次々と生まれた。そして、番組内の地域情報コーナーという企画では、身近な動植物の様子を通して季節の移り変わりを伝えるという内容の番組案を、動植物に詳しいメンバーの1人D氏から提案された。その後の新たな企画へとつながる提案であった。その企画を聞いたとき、行動制限が続く中で、自宅で過ごす時間が多くなり、外に出かける機会が減り、久しぶりに出かけた時に植物を眺めてはじめて、季節が移り変わっていたことに気づいたという体験を著者に想起させた。他のメンバーもその企画に賛同し、地域情報コーナーで「季節便り」がスタートした。身近な場所に咲く花々の写真を撮影し、生物の名称、日付、撮影場所、標高を付記した形で生物季節観測の情報を紹介することとした。**★23** スタートさせてみると、視聴者からの反響があり、こんな植物の花が咲いていますというメッセージと写真が届くようになり、それらの写真も番組で紹介することとなった。こうしてより能動的に視聴者の番組への参画を促すことにつながっていった。**★24**

HCMのメディア活動スタイルは、コロナ下で大きな変更を余儀なくされたが、実際には、メディア活動を継続していくと、これまでより多くの地域の人たちが能動的に番組に参加していただけるようになっていたのである。例えば、先に取りあげた番組へのオンラインでの参加については、比較的PCやスマートフォンの操作に苦手な年配の人たちもチャレンジするようになった。そして、ライブ中に視聴者がコメントを書き込むことで、番組キャスターと視聴者の間でやりとりが可能となる双方向コミュニケーションの実現もその一例である。番組中に視聴者が書き込んだコメントには、例えば、「新型コロナウィルスはなんとかならないかなあという思いがあるけれど、長期戦を覚悟という心構えが大事だと思った。医学情報に触れる心構えとして、「論文が出た」というのは、検証の段階で、いくつかある論文の1つだということを知っておく必要があると思った。」「多地点ライブ配信の特集を見て、地域の会議もこういうのを利用していったほうがいいのでは。」などがあった。奇しくも外出することが難しい状況になって、配信の方法も多地点となり、よりインタラクティブな方向性になり、地域の視聴者の番組への参加姿勢も変化していったことになる。

また放送局メンバーの中にも参加の仕方に変化があらわれた。コロナ禍でリモートワークとなったメンバーC氏からライブで番組に参加しますという申し出があり、番組配信当日のライブ参加メンバーが新たに複数人増えることにつながった。そして、そうしたメンバーたちは、自身の番組企画を提案し、その中にはこれまでの番組内容にはなかったエンターテインメント性のある企画も生まれ、放送局の番組の新たなジャンルの開拓につながった。**★25**

HCMのコミュニティメディア事業には、大きく分けて3種類ある：①動画配信による定期的・継続的配信事業 ②ウェブサイトを中心とした情報発信と交流の

★23—— 生物季節観測は、日本では気象庁が1953年から開始した。長年継続された生物季節観測を2021年から廃止するという発表があった。その理由は、観測対象の生物が気候変動により、観測できなくなってきたからだということであった。そのことをメンバーの1人D氏が知り、観測はゼロだったという記録を残すことと、観測をやめるということは異なることであると考え、この生物季節観測をこの地から続けていこうと、D氏は考えた。第425回定期配信 特集2「生物季節観測とは何か」
2020.11.28(2/2)参照
<https://vimeo.com/494727293>

★24—— 一例として、第394回定期配信 2020.4.25の地域情報コーナー「みんなが見つけた春便り東灘の桜編」と、エンディング動画「みんなが見つけた春便り 桜守公園の春1」を参照
<https://vimeo.com/418333201>

★25—— 第443回MEDIA ROCCO定期配信 特集1「キャスター林のチャレンジ・ザ・タイム vol 1」
2021.4.
<https://vimeo.com/536884667>

場の構築 ③ネットワーク形成と担い手育成事業。インターネット放送局の毎週の定期配信番組は①の事業に含まれる。この第3期においては、コロナ禍前には②や③に該当するHCMの事業として、NPO対象の活動紹介動画制作を行うワークショップやSNSのワークショップを開催していた。コロナ下における②や③に該当する事業の実施は、コロナ下での新たな関係性を生み出すことにもつながった。コロナ下ではNPOからリアルとオンラインのハイブリッドで開催するための技術協力サポートの依頼をしばしば打診されるようになったこともその一例である。こうしたイベントの技術協力サポートを通して、HCMは、NPOなどの市民団体の交流を実現し、リアルとオンライン双方の参加市民団体の交流を促進する役割を担える存在として地域NPOから認識されるようになってきた時期と考えられる。

このように、HCMはコロナ下でオンラインでの活動に移行していったが、一方で実空間での活動も重要であることを認識しており、それまでのスタジオを主体としたメディア活動ではなく、様々な団体が活動を展開する地域の交流拠点と協働することにより、新たなつながりを作り、つなぐことができるのではないかと考えている。^{★26} その試みはまだ始まったばかりであるが、地域メディア活動とはなにかを常に模索している。

★26——サテライトスタジオの新たな試みとして、2022年12月にパイロット番組を配信した。それを踏まえ、2023年4月から、本格的に地域の交流拠点と協働するサテライトスタジオの試みを開始した。
第532回MEDIA ROCCO定期配信 2022. 12.17 (1/3)
特集1 Tabunka×MediaRocco コラボ番組 リプロダクティブ・ライツ編 vol.1「今さら聞けない？ 生理のこと：その1 生理用品いろいろ」
<https://vimeo.com/826611830>

5. 考察

HCMは法人設立から10年以上にわたりそのメディア事業を継続してきた。本節では、特にインターネット放送局の活動を中心に、その事業プロセスを、前節で述べてきたように、第1期（生成期）、第2期（発展期）、第3期（変容期）の3つの時期として捉え、メディア事業の立ち上げから発展、直面してきた課題、転機の動的プロセスを時間軸で考察する。

第1期（生成期）では、4.2で言及したように、大学関係者という人的資源を活かしコミュニティメディア設立の準備を開始した。その後、番組制作講座の開催などを通じて地域住民へアプローチし、インターネット放送局の番組を制作・発信していくために必要な人材を獲得し、放送局活動を進めた。その準備のプロセスで、WGメンバーたちは、ライブ配信を熟知する一地域住民との対話を通してライブ配信の特徴を認識するようになり、番組スタイルやスタンスをメンバー間で形成し、共有していった時期と位置づけられる。

第2期（発展期）では、放送局の担い手に変化が生じた時期であった。学生たちが新たに加わり、自身の番組を企画するプロセスで、積極的にゲスト交渉をしたり、東灘地区を超えた取材先へ出かけていきスマートフォンなどの身近なデバイスを用いてライブ配信を試みるなど、番組制作活動は、人や組織をつなぎ、東灘という地理的にローカルな空間を超えたグローバルな拡がりを見せるようになっていった時期と捉えられる。

第3期（変容期）は、社会的な変革としてのコロナ禍という大きな外圧によって、放送局のこれまでのプロセスに大きな変化をもたらされた時期と考えられる。多地点ライブ配信の実験と構築を継続的に取り組んできた結果が、コロナ下のメディア活動が困難に直面した時、リアルな活動場所からインターネット上の空間に活動のスペースを移行し、メディア活動の継続へとつながった。

HCMの活動初期に共有された理念が、続く第2期、第3期に新たに参加したHCMメンバーにも連綿と共有されていることに著者が気づかされる出来事が

あった。HCMはメディア事業の1つとして、教育機関への授業協力を行ってきた。著者がある大学で担当する科目に、授業協力としてHCMの学生メンバー(以後E氏とする)にメディア実践経験について科目履修生に語っていただいた。★27 E氏は、第2期の終わり頃から第3期にかけて放送局の主力メンバーの1人としてMEDIA ROCCOの活動に参加していた学生で、大学卒業を機にHCMの活動から離れたが、当時を振り返り、次のように語った。「やりたいと思ったことをやれる環境だったので、迷ったらやってみる精神がついた。」「HCMは交流が主軸にあったので、成果物より過程を大事にするあたりが一人ひとりの挑戦を見守るゆとりをもたらせていたと思います。」そして、HCMの場を「強固すぎないつながり」とも表現した。HCM設立当初のメンバーたちが開局準備のプロセスで何度も対話を重ねる中で、「失敗しながら進めばいい。」「やりたいことはコミュニケーションだから」「思いきってやってみよう」という合意を形成し、番組を作ってきたスタンス、もしくは理念が、長期の活動を通じて、参加スタッフの入れ替わりを経験しながらも受容され続けてきたことが確認された。

長期時間軸から「あまみFM」をメディア事業モデルとして分析した金山の先行研究によれば、「局が大事にすべき放送の根幹概念の共有」を「長期に渡り実践しつづけていくことが容易ではない」ことが理解され、「組織の持続・発展の過程で生まれる課題や問題は、困難・障害という受け止めではなく、むしろ局の概念を定期的に再確認する機会であり、新たな表現を生み出す時機として受け止められる」と結論づけている(金山2019)。「あまみFM」のように、離島というローカルな地域性の色濃い場所におけるコミュニティメディア活動と同じような分析結果が、その理念の違いこそあれ、都市部におけるコミュニティメディア活動を実践してきたHCMにおいても、共通して得られている点は、興味深い結果と考えられる。

人の流入・流出の激しい都市部においては、奄美におけるような「在地主義」的な感情共有は難しく、むしろ、その地域の価値観は、多様化・分散化していく傾向が一般に見られる。すでに、メディア研究者田村紀雄が1972年に出版した『コミュニティ・メディア論』にもはっきりと示されているように、コミュニティというのは従来の地域ではなく、これから生まれる新しい共同体の在り方なのだと書かれている。また、「コミュニティー・メディアは、その古い伝統社会にある「地方」ではなく、現代における都市社会のうちに芽ばえつつあるコミュニティを育てる手段にほかならない」とも書かれ、コミュニティメディアは地元に関じたメディアという意味ではないと論じられている。HCMの活動も、その初期段階から、他地域からの人びとの参画を良しとし、実際に活動拠点となる地域に生活していない者もメンバーとして活動してきた経緯もあり、開かれたメディアを標榜してきた。長期の活動を通じて、メンバーの入れ替わりを流動的に経験しながらも、活動理念が受容され続けてきた要因には、4節の冒頭で述べた森田三郎氏やB氏や著者のような設立当初からのコアとなるメンバーが少数ながらも長期にわたって活動に参画していることも重要であると考えられる。他方、実際に活動に参加し続けている著者の実感として、こうしたコアメンバーがメディア活動において様々な負担を強いられている現状も見逃せない。★28 この問題点は、コミュニティメディア活動だけではなく、一般の市民団体に共通して観察される慢性的な問題である。

HCMの長期にわたる著者の実践研究において、地域のどのような人びとも参加可能なメディアとするには、インターネット技術の活用は重要なポイントであったと著者は考えている。5.1節では、どのようなインターネット関連技術と

★27——著者は、甲南大学文学部社会学科「発展研究F(メディアコミュニケーションと表現II)」の授業を社会学科の専任教員と共同担当している。当該科目は、コミュニティメディアの番組制作を実践的に取り組むことを通じて、コミュニティメディアの役割と機能、そして課題について考える授業内容である。2021年12月2日の授業の中で、E氏がゲストで参加し、MEDIA ROCCOでの経験について、受講生たちに語った記録を引用している。

★28——インターネット放送局の番組は、番組当日はライブ配信で行い、それをアーカイブ化するという公開方法をとっている。これは活動初期からメンバー間で決め、共有している。配信当日の番組をライブで行う理由としては、初対面の出演者たちであっても、MEDIA ROCCOが人と人をつなげる場を作ることにつながること、ゲストも放送局スタッフも気軽に参加できるということである。一方でアーカイブ化は非常に時間がかかる作業で、この作業を歴代のアーカイブ編集担当者が忍耐強く支えてくれたことを特筆しておきたい。

デジタルデバイスを活用してきたのかという点について、また、5.2節では、ローカリズムの視点から、人や組織のつながりは10年の間にどのように作られ拡がっていったのかという点について、そして、5.3節では、HCMのような非営利の市民主体コミュニティメディアの抱えてきた問題点について考察する。

5.1. インターネット関連技術とデジタルデバイスの活用

第1期という初期のメディア活動時期に、ビデオカメラ、PC、ライブ配信機器、スマートフォン、タブレットといった、ライブ配信と映像編集に使用する基本的な機材とデバイスと編集ソフトと、UstreamやTwitCastingといったライブストリーミングサービスとfacebookとTwitterのSNSを活用してきたことからわかるように、その時期その時期に登場したインターネット関連のサービスやデジタルデバイスを、積極的に取り入れ、組み合わせながら活動を展開してきたと言える。

これらの機材やサービスの習得には、地域住民の1人(A氏)が主として担当した。つまり、HCMの場合、放送業界のプロフェッショナルがその経験を活かし情報発信の技術的システムを構築したのではない。たまたま地域にライブ配信機器とその特性に詳しい人物がいて、その人から技術を習得する形でコミュニティメディアの活動を開始したのである。

第2期における使用機材・デバイスは、よりシンプルに、誰もが使いこなせるライブ配信の仕組みを選択する方向へ動いていった。HCMでの機材利用に関しては、「誰でもが参加できる」メディアを基本とし、利用機材とそのシステムの構築を進めた。その結果として、配信時の機材セッティングについては高齢者を含む全てのメンバーがライブ配信の設定を理解し、使えるようになっていた。

第3期では、多地点ライブ配信の構築に加えて、番組制作に参加するメンバーの中には、スマートフォンやアクションカメラのGoProなど、思い思いの利用したい機材を積極的に活用して配信を行うようになっていた。またコロナ下には地域NPOなどからリアルとオンラインを組み合わせたハイブリッド方式のイベント開催の技術サポートを依頼される機会が多くなり、依頼現場のニーズに即した「メディア活用開発」を求められるという新たな局面を迎えた時期である。ただし、スタジオで共通の機器を使用して番組配信していた時期と異なり、メンバー個人の配信技術レベル、多地点ライブ配信にオンライン参加するための自宅などの参加地点のインターネット環境、番組に参加する際に使用するメンバー個人が保有するデバイスの性能に差が生じてしまうという、負の側面が顕在化したことも事実である。

このように第1期から第3期までの放送局活動におけるメディア事業を長期的な時間軸で見ると、2000年以降に急速に発展してきた動画共有サービスやオンライン会議サービス、SNSの登場と拡大、動画撮影が可能となったモバイルメディアの社会への浸透などが、HCMのような動画配信技術を活用したインターネット放送局を確立していく上で、非常に重要であったことは間違いない。放送業界のプロフェッショナルに頼らないアマチュアリズムの視点で、コミュニティメディアの活動を継続的に展開してこられた要因だと考えられる。

5.2. 人や組織とのつながりがつながりの拡がりを生み出す

技術的な側面から離れ、人の側面に注目すると、第1期からメンバーとして参加していた大学関係者に加えて、第2期は、学生が多く参加するようになった時期である。その学生たちが、新たな学生たちやNPOとつながったり、そうしたつながりからゲスト出演が決まることも多くなった。インターンシップで近隣の高校生が参加する。主催イベントの音楽コンサートでは音楽に関心のある人たちがつながる。そして、リアルな空間で出会う機会を主催イベントで創出し、NPO、地縁組織、大学関係者、学生たちが交流する機会が一挙に増えた。第2期ではインターネット上の放送局の活動だけでなく、リアルな場でも人や組織とのつながりをつくりだすなど、HCMの全体活動を通してのつながりの拡がりを認識できた時期である。また、第3期においては、社会的に大きな質的変換を余儀なくされたコロナ禍において、多地点ライブ配信という技術的側面で放送局活動を継続した結果として、地域からの新たなニーズに応える地域メディアの役割を担うとともに、NPOなどの複数の市民団体とのネットワークづくりへと拡がった。

図4を参照いただきたい。この図は、HCMのメディア活動の核であるインターネット放送局の活動に含まれる「ライブ配信」「アーカイブ」「取材」を核としながら、「ワークショップ」「主催イベント」「メディア活用開発」のHCM事業のメディア実践が、実際の地理的な範囲で定義されるリアルな空間とウェブ空間の双方に拡がり展開している状況と、それらメディア実践の過程で生まれる個人や組織とのゆるやかなつながりを描いた概念図である。HCMは参加型のコミュニケーション・メディアであり、そのメディア活動を通して、こうした地域の多様な主体とのつながりを積極的に生み出すことを可能としてきた。



図4: HCMのメディア活動と地域のつながり (筆者作成)

5.3. 地域メディア活動が直面する課題

10年余りの活動を通じてHCMは、他の放送媒体を有するコミュニティメディアやNPOが直面する課題と共通する課題を有していることがわかった。人材の多様性と資金の確保である。HCMの第1期から第2期にかけて、メディア活動への参加者が拡がっていく過程の中で、メディアの担い手は次第に学生中心へとシフトしていった。その変化は学生が主体的に動き、新たなつながりを生み出すことにつながっていった。一方、10年以上の長期的なメディア活動期間に、その担い手には流入と流出があり、人材の流動性が生じてきた。流出入の要因は個人により様々であるが、第1期から第3期を著者が分析した結果、次のような理由があることがわかった。先述のメディア活動の理念の受容と関わってくるが、メディア活動の方向性と個人のメディア活動の指向性に次第に齟齬が生じ始める場合や、個人にとっての新たに進む方向性が見えてきた場合などである。

HCMが第1期から第2期にかけて活発に実施していた独自の事業としての人材育成を目指す番組制作ワークショップ等は、活動の繁忙等の理由があり、最近ではあまり開催しなくなり、第3期に入ってから固定のメンバーが活躍するようになっていった。このことは、人の流入という点に関して、その多様性の減少につながった。コロナ禍になると、さらにその状況は顕著になっていった。コロナ禍が長期化する中で、オンラインによるボランティアの受け入れを断続的に行ってきたが、人材の定着という意味では成功していないと言わざるを得ない。その状況は、放送局の番組制作へも影響を及ぼしている。

HCMは、「東灘区に暮らし、働き、学ぶ人びとに対して、コミュニティメディアに関する事業などを行い」将来的には「東灘を中心とした阪神間の各地域の住民の自宅や会社、学校、行政、公共施設、NPO団体などにサテライトスタジオを開設」することを活動の将来像と描いている。HCMは活動拠点を東灘におきつつ、関わる人たちを設立当初から東灘に制限することなく、阪神間の各地域とより広いエリアを考えていたことになる。それは設立当初のメンバーの中にも東灘在住ではないが、「学ぶ」「働く」場として東灘と関わりのある人たちがいたこととも関係があるだろう。また東灘は、地域の概要で言及したように、大阪と神戸の中間に位置し、住民であっても、昼間は大阪や神戸へ移動する一定の人口があり、一日の局面でも流入と流出が繰り返される都市の特徴を内包しているエリアである。だからこそ、こうした地理的特徴を活かした人との協働によるメディア活動をより積極的に考えていくこともこれからのメディア活動において必要だと著者は考えている。

コロナ禍における地域メディア活動のオンライン化は、多地点ライブ配信の構築を実現し、メディア活動の継続という展開をもたらした一方で、メディア活動の「中」と「外」の双方で、出会いと新たな接点の大幅な減少という結果とコミュニケーションの難しさという状況に直面することになった。コロナ禍の初期の頃には、以前からのネットワークを活用し、メディア活動を展開していたが、コロナ禍が長期化していく中で、先に言及した困難さが顕在化してきた。またメディア活動への参加に際しての技術面でも、個人のインターネット環境と保有するデバイスの性能と、配信に関わるスキルの違いにより、メディア活動への参加が制限される状況を生み出してしまったことは先に述べた通りである。スタジオというリアルな空間で活動をしていた時には、わからないことがあればすぐにハンズオンで対応できたことが、オンラインでは非常に困難になるのである。

また、対面の時であれば、とくに用がなくてもそこにいることができる場が

あったが、オンライン会議サービスを利用した多地点ライブ配信方式で番組制作と発信を進めていこうとすると、予定の時間がきてメンバーは顔を合わせ、番組配信が終わるとそれぞれはオンライン上から退出する。このサービスの利用のみだと、活動に新しい人びとが入り込む余白がない。この余白を提供していたのは、リアルな場であり、空間であり、こうした余白が重要なことであったと著者は考える。

また対外的なメディア活動の展開を考えた場合に、放送局活動では出張配信という形で地域の現場へ出かけたり、法人事業の一環として技術協力をを行うなどの活動を行ってきたことは、その現場での人や組織との新たな、時に偶発的に生じる出会いやつながりを紡ぎ出す機会となっていたが、コロナ禍の活動制限の状況では、それも難しくなってしまった。

次に資金面の課題に関しても言及しておく。HCMはNPO法人の組織形態をとり、運営メンバーを含め全てボランティアベースで活動を展開している。HCMはコミュニティFM局ではなくインターネット放送局の開局を選択したことで、ランニングコストはそれほど高くはなかった。しかし、急速な技術革新が進行してきたメディア史を振り返ると、HCMの10年を超える活動期間中に、インターネット環境には新たなSNS、動画配信サービスや通話サービスやデジタルデバイスが次々と誕生している。HCMはそれらを積極的に活用しながら、メディア活動を展開してきた経緯がある。一方でこうした環境変化の中で、メディア活動を継続していく上で、急速な技術革新に対応するメディア環境を整えていくために必要となる資金は、そう多くは必要ないにしても一定程度必要であり、活動期間が10年を超えた現在、こうした課題に直面している。

6. おわりに

本研究は、これまでコミュニティメディアの事例として取り上げられてきたCATVやコミュニティFMではなく、放送法上の「放送」に分類されないインターネット放送局を、非営利のコミュニティメディアの一形態として比較的初期に立ち上げ、10年間以上にわたりメディア事業を継続させてきたNPO法人HCMのMEDIA ROCCOに開局の草創期からメンバーとして加わり、活動実践者として参画した著者の長期にわたる参与型のフィールドワークをもとにした質的調査法に基づいている。インターネット放送局に関する研究は、これまで地域メディア研究において、ほとんど注目されてこなかった。その理由の一つとしては、本稿で取り上げたMEDIA ROCCOがそうであるように、放送事業の素人である地域住民が主体となった、ある種「お遊び」と捉えられてきた面があると考えられる。しかし、コミュニティFMがインターネットを活用したサイマル放送を行い、またインターネット放送へ移行するコミュニティFM局が現れている現状を垣間見るにつけ、コミュニティFMなどと較べて、それほど初期投資や経営面で負担を強いられず、情報技術の進展に伴ってますます一般の人びとにとってアクセスが容易になっているインターネット放送でのコミュニティメディア活動を評価すべき時期にきているのではないだろうか。MEDIA ROCCOを運営するHCMの定款には、「東灘に関わる人びとが、東灘地区で働き、学び、暮らす人びとに必要な、きめの細かい情報を、自分たち自身の手で集め、話し合い、発信していく場と仕組みをつくる」とある。このように、地域に暮らす、もしくは関係するすべての人びとの参加を受け入れるアマチュアリズムの視座を活

動の目的に据えてコミュニティメディア活動を展開してきたわけであるが、アマチュアリズムを負の側面だけと捉えるのではなく、むしろアマチュアリズムならではの視点で、MEDIA ROCCOが危機を乗り越え、なんとか存続してこられたとの思いを著者などは強く感じる。

長期にわたる放送局の動的プロセスを分析すると、生成・発展・変容のプロセスで関わる人びとは変わっていく中で、本稿で記した放送局開局当初のメンバーの発言、「失敗しながら進めばいい。」「やりたいことはコミュニケーションだから」「思いきってやってみよう」という放送局の理念が、10年余りの間に、活動の現場も、関わる人びとも、社会の状況も変容するなか、E氏に引き継がれていることは著者にとって予想外であった。他方、アマチュアリズムとともにもうひとつの重要な視座である、ローカリズムの視点からも、遅々とした歩みではあったものの、HCMは人や組織のゆるやかなつながりと交流の場を地域につくり出しつつある。実空間とオンライン双方の参加市民団体の交流を促進する役割を担える存在としてHCMが、地域NPOから認識されるようになってきていることを考えると、人の流入・流出が激しい都市型のコミュニティメディアの典型事例として、今後も引き続きHCMの活動に現在進行形で関わり、メディア実践と調査分析を継続していきたいと考えている。最後に、「あまみFM」に関する金山の研究において（金山2019）、「メディア事業として望まれる展開を分析するには、表現行為は事業者の目線から、受容行為はリスナーの視点から理解されることが求められる」とされ、「オーディエンスと地域の変化にかかわる理解」がこれまでの地域メディア研究では欠けていたと指摘された点は、著者も重要な問題提起と考える。今後の研究課題としたい。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、特定非営利活動法人ひがしなだコミュニティメディアの設立から現在までの活動を共に歩んでくださったすべてのメンバーに感謝申し上げます。また、本稿の執筆に際して、2名の匿名の査読者から貴重なコメントをいただき、本論文の議論を明確にすることができました。最後に、本稿を執筆する機会を与えていただいた編集委員の方々に深くお礼を申し上げます。

参考引用文献

- Deuze, M. 2011 Media Life. Media Culture & Society 33(1): 137-148
- 土橋臣吾 2022 「環境化したメディアをどう捉えるか：アクターネットワーク理論の視座から」『メディア研究』101: pp.45-64
- 船津衛 2006 「コミュニティ・メディアの現状と課題」『放送大学研究年報』24: pp.25 - 33
- 林茂樹 2003 「2 地域メディア小史—新しい視座転換に向けて」田村紀雄編著『地域メディアを学ぶ人のために』pp.29-54, 世界思想社
- 林葉子・田中悟 2014 「コミュニティ・メディアの成功の条件とその可能性—中海テレビ放送を事例として—」『国際協力論集』22(1) : 149-177
- 東灘区役所まちづくり課・神戸市企画調整局 総合計画課編 2011 『すてきがあふれ、交流の風が吹くまち ふるさと 都市・東灘 東灘区計画』2011年2月
- 金山智子編著 2007 『コミュニティ・メディア コミュニティFMが地域をつなぐ』慶應義塾大学出版会
- 金山智子 2019 「メディア事業過程モデルによる地域メディア分析—あまみエフエムを事例として」『マス・コミュニケーション研究』95: 67-85
- 加藤晴明 2007 「コミュニティ放送の事業とディレンマ」『現代地域メディア論』日本評論社 : pp.135-152
- 加藤晴明 2015 「自己メディア論から地域の自己メディア論へ—(地域と文化)のメディア社会学：その1—」『中京大学現代社会学部紀要』9(1) : pp.1-32
- 加藤晴明 2015 「地域メディア論を再考する—(地域と文化)のメディア社会学のために：その3—」『中京大学現代社会学部紀要』9(1) : pp.67-114
- 神戸市HP 「神戸市人口統計」<https://www.city.kobe.lg.jp/a47946/shise/toke/toukei/jinkou/index.html>
(2023年3月参照)
- 神戸市HP 『神戸人口ビジョン改訂版 令和2年3月』(2023年7月23日参照)
<https://www.city.kobe.lg.jp/documents/22664/jinkovisionkaitei.pdf>
- 甲南大学文学部事務局 「FM関連資料 2008年～2010年」
- 松本恭幸, 佐藤和文, 佐藤博昭 2021 『令和のローカルメディア』あけび書房
- 松本恭幸 2020 「地域メディア訪問5 都区内の地域メディア」『月刊 マスコミ市民』621 : pp.70-73
- 松本恭幸 2021 「地域メディア訪問8 地域の情報発信の先駆けとなったインターネット放送局」『月刊 マスコミ市民』625*pp.61-65
- Mills, C. W. 1963 Power, Politics, People: The Collected Essays of C. Wright Mills. New York: Oxford University Press. (青井和夫・本間康平監訳 1971 『権力・政治・民衆』みすず書房)
- 中村和彦 2008 「アクションリサーチとは？」『人間関係研究』7: 1-25
- 総務省 2000 『通信白書平成12年版』(2023年7月23日参照) <https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/h12.html>
- 総務省 2001 『情報通信白書平成13年版』(2023年7月23日参照)
- 総務省情報流通行政局 2023 「コミュニティ放送局開設の手引き 2023年4月」(2023年7月23日参照)
<https://www.tele.soumu.go.jp/resource/fj/system/bc/commu/tebiki.pdf>
- 杉万俊夫 2006 「質的方法の先鋭化とアクションリサーチ」『心理学評論』49(3) : 551-561
- 田村紀雄 1972 「コミュニティ・メディア論—(地域)の復権と自立に」現代ジャーナリズム出版会
- 田村紀雄編著 1983 『地域メディア論』日本評論社
- 田村紀雄編著 2007 『現代地域メディア論』日本評論社
- 田辺真人 『東灘歴史散歩』2021 東灘区役所、「神戸市東灘区」、https://www.city.kobe.lg.jp/b07715/kuyakusho/higashinadaku/shoukai/shoukai/history_01/index.html (2023年7月23日参照)
- 谷富夫・芦田徹郎編著 2009 『よくわかる質的社会調査 技法編』ミネルヴァ書房
- 特定非営利活動法人ひがしなだコミュニティメディア運営会議議事録 2010年度～2022年度
- 特定非営利活動法人ひがしなだコミュニティメディア事業報告書 2010年度～2022年度
- 鳥海希世子 2020 「コミュニティ・メディアをめぐる実践研究の地平—民衆芸術・デザイン・地域社会をキーワードに—」『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』98: 31-51
- 辻泰明 2019 『インターネット動画メディア論—映像コミュニケーション革命の現状分析—』大学教育出版
- 辻野理花 2009 「多文化共生社会を実現するために—国際交流・在日外国人支援にかかわる市民団体の活動を中心として—」
- 渡辺武達・山口功二・野原仁編著 2011 『メディア用語基本事典』世界思想社
- 吉岡至 2013 「変容する情報環境と地域メディアの役割」『セミナー年報 2013』p. 89-99

URL

- MEDIA ROCCO ライブ配信視聴チャンネル <https://youtube.com/@mediarocco>
- MEDIA ROCCO アーカイブ視聴 on Vimeo <https://vimeo.com/mediarocco>
- 特定非営利活動法人ひがしなだコミュニティメディアウェブサイト <https://mediarocco.jp>

配信回	配信年月日	Vimeo #	特集	地域情報コーナー
第387回	2020/3/7	407925758 402861965	特集1 オーストリア紀行最終回 特集2 働くってなに？	・神戸市デザイン マンホール:三宮編 ・庭に咲く花々
第388回	2020/3/14	407941491	特集 人のルーツを見直す	第19回六甲アイランドチューリップ祭 イベントは中止
第389回	2020/3/21	412467527 407962886	特集1 現代スマホ事情 特集2 たぶんか こどものけんこうえほん	身近な春
第390回	2020/3/28	412488998	特集 春の訪れ:ホテルイカ	季節動画「早春の花」
第391回	2020/4/4	415503010	特集 最後まで口から食べたい〜嚥下障害への取り組み	身近で見つけた花たち
第392回	2020/4/11	416002569	特集1 男の居場所〜男の役割がある 特集2 住めば都になるように	季節動画「春の昆虫:冬眠中の昆虫、そして活動し始めた昆虫」
第393回	2020/4/18	416873438 416868233	特集1 新型コロナウイルス 対策5つの提言 特集2 多地点ライブ配信挑戦記! 2020	みんなが見つけた春便り:木曾三川公園チューリップ編
第394回	2020/4/25	418333201	特集 新型コロナ世界事情〜今世界はどうなってる？	・みんなが見つけた春便り 東灘の桜編 ・ED動画:みんなが見つけた春便り 桜守公園の春
第395回	2020/5/2	428795371	特集 邪馬台国を考えよう	・生きがいしごとサポートセンター神戸東(愛称:フラビー) ・新型コロナウイルスの影響に伴う、NPOの2020年度社員総会開催方法について ・「東灘 深江区だんじり」映像
第396回	2020/5/9	428797792	特集 コロナウィルスとは何者か？	・臨時休校期間のこどもの緊急対応【コロナ対策】@東灘こどもカフェ ・『マミートラックに陥らないために 講演「仕事と育児の両立の心構え」』@甲南大学ビジネス・イノベーション研究所 ・アマビエについて
第397回	2020/5/16	428807427	特集 コロナウィルスとは何者か？第2弾	・フラミンゴのヒナ誕生神戸市立王子動物園 ・季節動画「我が家の猫の額の庭とご近所に咲く春の花」
第398回	2020/5/23	429023519	特集 コロナウィルスとは何者か？第3弾	・新型コロナウイルス に関連して、神戸市東灘区の文化施設情報まとめ:施設の新型コロナウィルス対策について ・菊正宗酒造、医療機関に高濃度エタノール無償提供
第399回	2020/5/30	433406101 429029792	特集1 はじめてみよう! クリエイションシリーズ「おうちでTRY! カメラワーク」 特集2 パンデミック後の暮らしはどうなる? 第1弾	・西神山手線ライトイットブルー ・レトロな東灘 東灘の古い写真募集
第400回	2020/6/6	436855531 436863359	特集1 二十四節気の芒種について 特集2 MEDIA ROCCO 400回記念 振り返り名場面集	Feel Photo:東灘編(神戸公式観光写真ライブラリー)
第401回	2020/6/13	436871463 436876438	特集1 はじめよう! クリエイションシリーズ:動画の作り方 特集2 春夏秋冬はなぜ起こる	神戸・東灘の美術館@六甲アイランドの再開情報
第402回	2020/6/20	436881604	特集 はじめよう! クリエイションシリーズ:動画の作り方 実践編	大学等の授業は今
第403回	2020/6/27	443342210	特集 ナイチンゲールと統計第1弾 ナイチンゲールってどんな人?	「梅雨時の花vol2」微雨→梅雨
第404回	2020/7/4	443381665	特集 ナイチンゲールと統計第2部 統計学者としてのナイチンゲール	・「2020年版 歩いて居場所MAP (2020年3月発行)」&「居場所の開催状況について」JNPO法人きょうどうのわ ・臨時展示「世界最小の恐竜卵を発見! ~篠山層群より発掘された獣脚類恐竜の卵・卵殻化石~」 ・スライド「梅雨時の花vol.3」半夏生、紫陽花、モリアオガエル卵塊
第405回	2020/7/11	445782605	特集 線状降雨帯、土砂災害の基礎 コロナ感染症が収束していない中での激甚災害からの避難法	梅雨時の花:紫陽花の本当の花
第406回	2020/7/18	445786019	特集 感染症と戦った日本人たち第1弾	驚異と怪異@兵庫県立歴史博物館
第407回	2020/7/25	443964757	特集 ZOOMをはじめてみよう!	・六甲山アリスフェア ・バーチャル異人館 ・神戸市 外国人への情報提供に関するアンケート
第408回	2020/8/1	455936853	特集 まつりと災害	・住吉川川柳コンクール ・倚松庵 納涼夕涼み ・こうベキッズ百科
第409回	2020/8/8	456208606	特集 なぜ、いま昆虫食が注目されるのか?	・芦屋の時間大コレクション展@芦屋市立美術館 ・食虫植物のひみつ@六甲高山植物園 ・硝子の動物園@神戸トンボ玉ミュージアム
第410回	2020/8/15	849732556	特集 祇園祭と厄災 II	・お盆の風景:京都北部松上げ ・住之江区だんじりと記念写真を撮ろう
第411回	2020/8/22	462112834	特集 スペイン風邪の猛威~百年前のパンデミック(平生日記シリーズ)	・消防艇が定期歓迎放水でおもてなし withコロナ KOBEBE応援プラットフォーム ・南家和香子型絵染展- 虫を語る-
第412回	2020/8/29	462128727 462135679	特集1 はじめよう! クリエイションシリーズ:デザインで伝えよう 特集2 湖東を訪ねて	神戸夏送り花火

表3: 番組リスト表 [2020年3月7日~2021年3月27日] (筆者作成)

第413回	2020/9/5	462702733	特集 発酵と腐敗	<ul style="list-style-type: none"> ・KOBEN野菜を食べようキャンペーン@市内スーパーマーケット ・動く！美術 動きはどう表現されてきたか Motion in Art ・第10回世良美術館「水彩画教室作品展」
第414回	2020/9/12	463277850	特集1 オンラインでもactionを起こす！～甲南大学ACT地域広報グループ 特集2 視覚障害者が使えるショートカットキーの話	<ul style="list-style-type: none"> ・六甲ミーツ・アート芸術散歩 ・KOBEN観光の日 ・Swing Jazz (online!) Cruise
第415回	2020/9/19	463286153 465334409	特集1 クラシック・オーケストラについて～ドヴォルザーク交響曲第9番新世界より～ 特集2 気にしたことある？普段目にするアイコンを比べてみよう！	<ul style="list-style-type: none"> ・【予約制】特別展「ムットーニのオルゴールシアター」 ・民謡初心者講習会 ・地域課題を探り解決する方法を学ぶ
第416回	2020/9/26	465337808	特集 植物たちの多様な繁殖戦略	<ul style="list-style-type: none"> ・原種シクラメンとダイヤモンドリリー展@六甲高山植物園 ・特別展「無言館 遺された絵画からのメッセージ」神戸ゆかりの美術館 ・デンマーク・デザイン - 特別展示 神戸ファッション美術館
第417回	2020/10/3	465355906	特集 東京一極集中の問題と解決を目指して	<ul style="list-style-type: none"> ・「おうちでACT～茶華道料理部道心会編～「野菜たっぷり！タコライスをつくろう」 ・「コスモスマつり」@神戸総合運動公園 ・多文化フェスティバル深江
第418回	2020/10/10	467338663	特集 東京一極集中の問題と解決を目指して	<ul style="list-style-type: none"> ・琉球音楽祭@鉄球広場 ・とんぼ玉展覧2020@KOBENとんぼ玉ミュージアム ・オンライン六甲ミーツ・アート ～お家で芸術散歩～
第419回	2020/10/17	471336061	特集 ハロウィン	<ul style="list-style-type: none"> ・Withコロナでもつながり続けるための居場所交流会 ・甲南大学企画展:2020年度 ムラギシマナヴ WEB企画展「青い警告」 ・リアル謎解きゲーム ～NO密で濃密な時間を秋の神戸東灘で～
第420回	2020/10/24	478787663	特集 ハロウィン第2弾	
第421回	2020/10/31	478794852 478796962	特集1 近頃の寝かしつけ事情 特集2 植物たちの多様な繁殖戦略 part2	<ul style="list-style-type: none"> ・通学路で見つけた自然たち
第422回	2020/11/7	478801675	特集 ZOOMをはじめよう！第2弾	<ul style="list-style-type: none"> ・コープ岡本「レインボースクール」 ・須磨離宮公園「秋の洋らん展」 ・世界糖尿病デーイン兵庫ブルーライトアップ
第423回	2020/11/14	480278734	特集 住吉川の落ち鮎	<ul style="list-style-type: none"> ・国立民族学博物館特別展「先住民の宝」 ・七十二侯と「生物季節観測」廃止
第424回	2020/11/21	491940020	特集1 一歩踏み出す勇気を持って、居場所でスマホを学び合う～神戸いたやどばあちゃん～ 特集2 コロナ禍での活動を模索する地域団体をつなぐ 第5回居場所サミット in 神戸	<ul style="list-style-type: none"> ・ザ・ナイト・ミュージアム～夜の芸術散歩(六甲ミーツアート) ・にじいろのさかな原画展～マーカス・フィスターの世界～@神戸ファッション美術館
第425回	2020/11/28	491515432 494727293	特集1 外国人コミュニティとコロナ 特集2 生物季節観測とは何か	<ul style="list-style-type: none"> ・ふかえ～なWeb祭り ・第1回芦屋OBENTOフェスタ2020 ・花森安治『暮らしの手帖』の絵と神戸@神戸ゆかりの美術館
第426回	2020/12/5	494731094 494733922	特集1 災害時に孤立したらどう対応する？ 特集2 あなたの町の生物季節観測を募集します！	<ul style="list-style-type: none"> ・資料室企画展「災害時の感染症の拡大を防ぐ」@人と防災未来センター ・冬の企画展「神戸でシル！ミル！宇宙展」@バンドー神戸青少年科学館 ・特別展「つなぐ TSUNAGU—THE POWER OF KOBE CITY MUSEUM」@神戸市立博物館
第427回	2020/12/12	494734845	特集 コロナ禍における発酵食品の流行について	生物季節観測募集のお知らせ
第428回	2020/12/19	500004779 500024738	特集1 地元の野菜、食べませんか？(甲南大学発展研究FⅡ 受講生企画) 特集2 今年はオンラインで開催！ふかえ～な祭り	<ul style="list-style-type: none"> ・生物季節観測を募集します！ ・じぶんがつくる こうべのあかり」展@白鶴酒造資料館 ・今こそGUTAI 県美の具体コレクション@兵庫県立美術館
第429回	2020/12/26	502099894	特集 コロナ禍における年中行事・発酵食品	<ul style="list-style-type: none"> ・神呪寺・鷲林寺スライドショー ・「ふかえ～な祭り」オンライン開催
第430回	2021/1/2	502111401 502120078	特集1 コロナ禍の年末年始の過ごし方 特集2 はじめよう！クリエイションシリーズ お正月用のバーチャル背景を作ろう！	<ul style="list-style-type: none"> ・生田神社初詣(おみくじのQRコードについて) ・弓弦羽神社(手水舎について) ・湊川神社
第431回	2021/1/9	502124342 507928505	特集1 誌面上でお祭り開催！～ふかえ大敬老新聞～ 特集2 実践！みんなの地産地消(甲南大学発展研究FⅡ 受講生企画)	<ul style="list-style-type: none"> ・東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に向けたカウントダウンイベント ・グッドデザイン神戸2020オンライントークセッション ・令和3年神戸市消防リモート出初式 ・こうべあい・ウォーク<オンライン開催>

第432回	2021/1/16	513416882	特集1 地震災害時の備え:都市直下型地震の場合 特集2 災害時の避難ルートを考えよう!」地震・津波の場合	・ひょうご安全の日のつどい1/17 ・本山第一小学校区の「避難所開設訓練と震災黙とうの会」2021年1月17日 ・2021年「1.17KOBEに灯りをinながた」緊急事態宣言を受け縮小開催
第433回	2021/1/23	513429669	特集 災害が起こったその時、状況判断をしっかりとしよう 命を守ったあと二次災害に遭わないために	・【イルカライブ館32年間の想いを込めて】イルカライブ「THE FINAL〜つなぐ2021→2024〜」@須磨水族館 ・北斎が描いた船@神戸海洋博物館 ・rocket world展 vol.2」@神戸アートビレッジセンター
第434回	2021/1/30	513442350	特集 コロナ禍のレンタルな話	・岡本梅林公園 梅の写真展と開花情報@東灘区民センター ・成田一徹切り絵展@神戸生活創造センター ・市民みんなでペットボトルキャップを集めてつくる指定ゴミ袋
第435回	2021/2/6	521810091	特集 節分の日がなぜ移動するか	・2021年南京町春節祭 ・特別展「こわくて、たのしいスイスの絵本展〜クライドルフ ・ホフマンの世界〜」@神戸ファッション美術館 ・新型コロナウイルス感染症に係る自宅療養者支援
第436回	2021/2/13	521821144	特集 もう一度コロナについて考えてみようワクチン接種が始まるにあたってー	・あなたの町の生物季節観測:梅の写真 ・難民と神戸を学ぶ講演とまち歩きのご案内:白系ロシア人と神戸-神戸のチョコレート産業を作り上げた人たち ・定例防災体験「VR体験とカードゲームで災害を疑似体験しよう ・アフリカン現代アート「ティンガティンガ」原画展
第437回	2021/2/20	535826324 535831173	特集1 七草と若菜摘み 特集2 教えて!みんなが自炊に求めるハードルは?	・あなたの町の生物季節観測:季節の花 ・冬の植物園で種とあそぼう」@神戸市立森林植物園 ・書籍消毒機導入のお知らせ@東灘図書館
第438回	2021/2/27	535842105	特集 雛祭りを楽しもう!!	
第439回	2021/3/6	526261602 535879032	特集 二十四節気と生物季節観測	・地域情報コーナー特別編:ディス・イズ・ショウタイム ・ライトアップinグリーン運動(世界緑内障週間啓発活動) ・ちびっここうべ2020「デザインの見方を学ぼう」 ・神戸市内在住外国人向け情報サイト ・季節の花
第440回	2021/3/13	535891845	特集 暮らし目線で考える防災との付き合い方〜清流の国ぎふ女性防災士会	・第50回神戸まつりの再延期及び関連行事の開催について:東灘は秋頃開催予定 ・第46回こうべ市民美術展@原田の森ギャラリー ・生物季節観測:季節の花
第441回	2021/3/20	536866347	特集 春到来!生物季節観測を見つけてみよう:芦屋総合運動公園を歩きながら	・都市公園での花見に関する感染防止の取り組み ・王子動物園開園70周年 ・東灘区大学生フォトコンテスト ・ひがしなだペーパークラフト
第442回	2021/3/27	536876428	特集 ひなまつりのお祝いの食べものってなーに? MEDIA ROCCOオリジナル 紙芝居初上演!	季節の花:富山市、西宮市、東灘、加古川市から生物季節観測応募者からの写真もご紹介